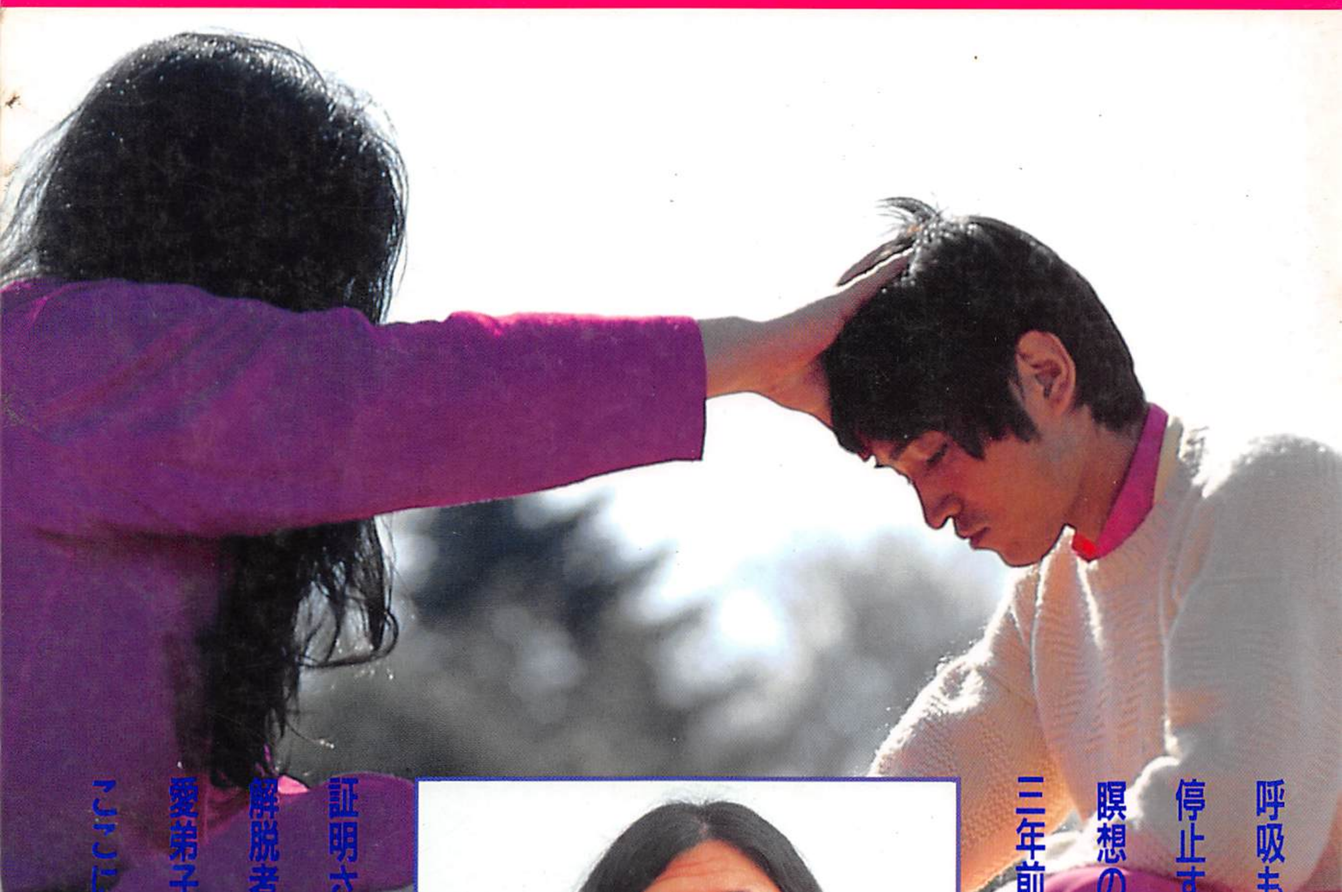
DOCUMENTARY
UNDERGROUND
SAMADHI
1991

ザ・サマディ PART II

実録：アンダーグラウンド・サマディ1991





呼吸も心臓さえも
停止するという
瞑想の究極状態"サマディ"
三年前、あの麻原彰晃尊師が

証明された
解脱者の奇跡を
愛弟子マイトレーヤ正悟師が
ここに再び証明！



呼吸も、そして心臓さえもが停止してしまうというサマディ。この究極の瞑想状態は、"解脱者"と呼ばれる者たちが呼吸を含めてすべての煩悩を心の支配下においているという証明に他ならない。

そして、ここに紹介するアンダーグラウンド・サマディは、オウム真理教の麻原彰晃尊師のもと、激しい修行によってマハー・ムドラー、言葉を変えれば仏典でいわれるところの供養値魂（阿羅漢）に到達したとされた魂が、まさに"解脱"の状態に到達していることを多くの人々にもわかるように科学的に証明した実験である。

宗教には二つのタイプがある。一つは思い込み宗教で、指導者のステージを表わす何の目安も証明もなく、漠然としたイメージのみを大衆に与え、受け手側もイメージのみに翻弄される。そして、もう一つが検証的宗教で、サキャ神賢（釈迦牟尼）の教えや原始ヨーガに見られるように、教典にステージをはかる一定の目安を表わし、後続者が正しい修行の道を進んでいるかどうかを確認できるものである。
そして、どちらが我々を本当の意味で幸福に導いてくれるかは、サキャ神賢、偉大なヨーガの成就者たちがすべての世界を知り、最高の境地に至る道を説かれている事実からも自明の理であろう。

この本を読むことで皆さんが、宗教とは本来、科学的であることに気づき、まやかしの宗教に惑わされない、しっかりとした視点を備えることができれば幸いである。

さらには、オウム真理教の解脱者が、煩悩を超えた本当の意味で個の完成をなした"解脱者〟であると理解されることを願って。

1991年12月

AUM EDITORIAL STAFF

UNDERGROUND SAMADHI

解脱の証明

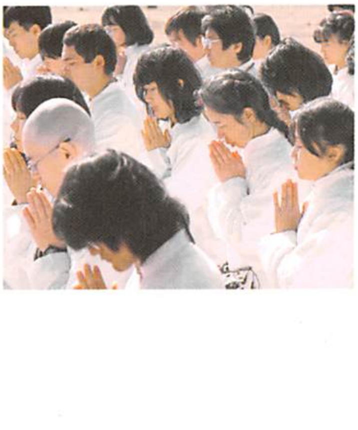
ここには真の〃解脱者〃がいる



土中に埋められたチェンバーがつくるわずかな空間。
それは常人ならたった三日間で死に至らしめられる
恐怖の世界でもある。



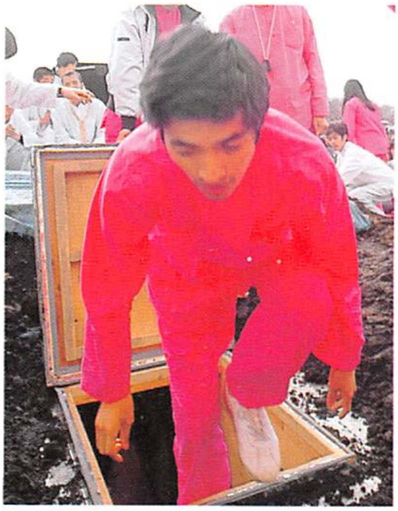
しかし、彼は還ってきた。
五日間、百二十時間にわたる挑戦を終えて、
自らの足で今、大地を力強く歩き始めたのである。



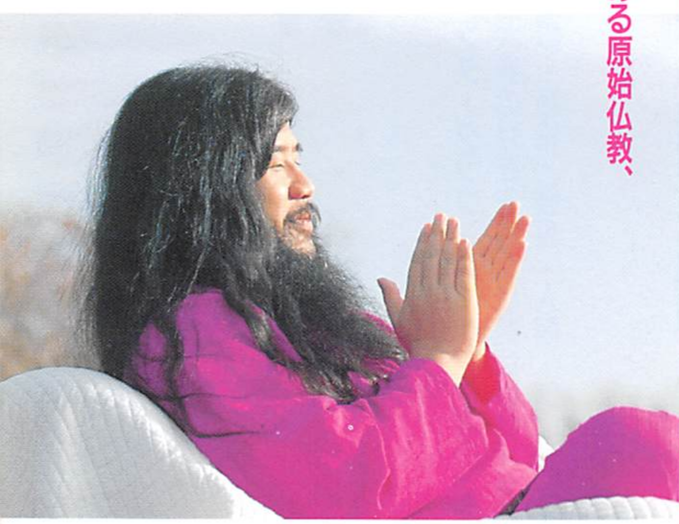
アンダーグラウンド・サマディ——
一つの偉業を達成した瞬間、
彼は自らが〃解脱者〃であることを証明した。







しかもそれは、サキャ神賢（釈迦牟尼）の教えである原始仏教、
あるいは原始ヨーガ教典の記述に基づく
だれもが納得する証明だった。









UNDERGROUND SAMADHI

欲六界の証明

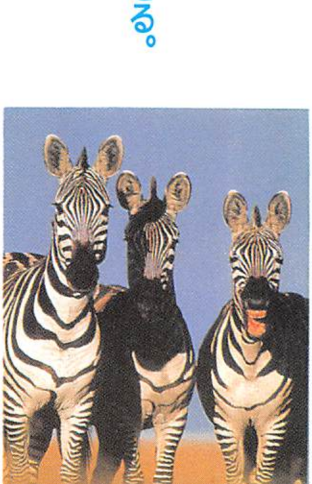
アンダーグラウンド・サマディの成功は、
欲六界の存在をも間接的に証明する結果となった。
地獄・動物・餓鬼・人間・阿修羅・天から構成される欲六界。

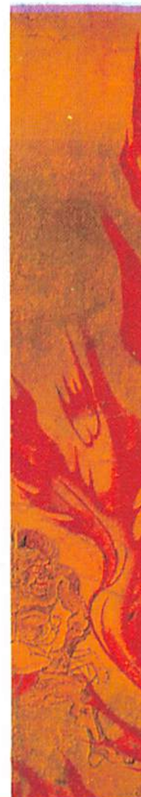


これらを生きながらにして見ようとした場合、
本来は各々が修行して瞑想で確認するしかない。
しかし、それぞれの世界の投影はこの人間界においても確認できる。

地獄も天の世界も存在していた！









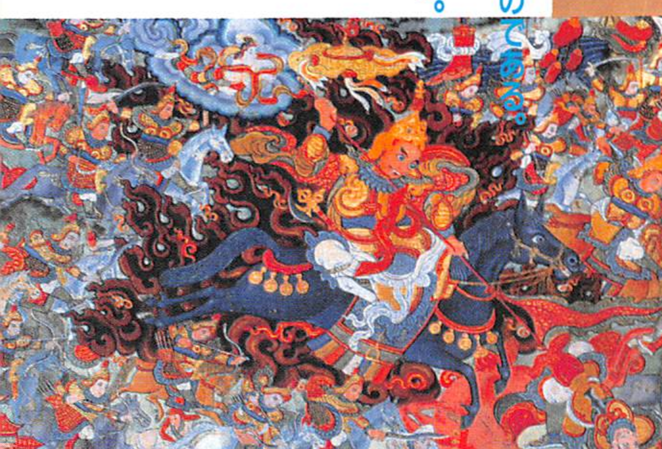
病で痛みが止まらない、食べたいものが食べられない……
こういう人間の存在こそ地獄、餓鬼の投影に他ならない。
そして、アンダーグラウンド・サマディによって





「五日間の断水断食でも生きられる」
「少ない酸素量で生きられる」という証明がなされたとき、
仏典に記されていた天界の住人の特徴、

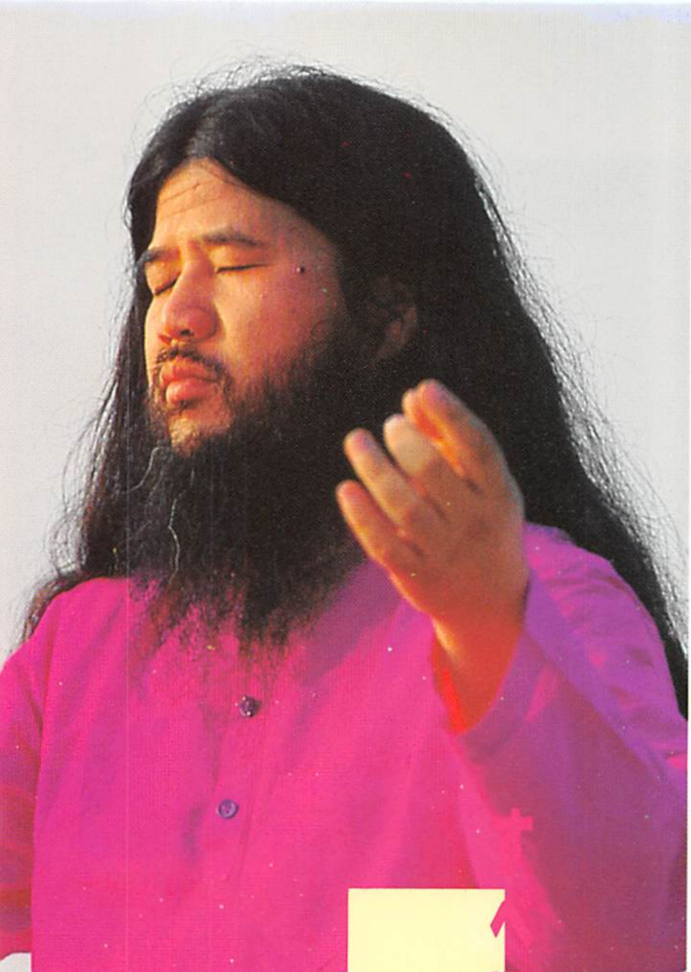
そして、その投影を我々は見ることができたのである。
アンダーグラウンド・サマディ――
それは欲六界の存在の一つの証明でもあった。





UNDERGROUND SAMADHI

真理の証明



仏教の開祖サキャ神賢が、
そして麻原彰晃尊師が説かれる〝真理〟の根本的な教え、
それは、「すべては心の現われである」ということである。

すべては心の現われである

心の現われによってこの欲六界は形成され、
そして、心を修行によって浄化していく先に、
この欲六界＝幻影からの解脱がある。

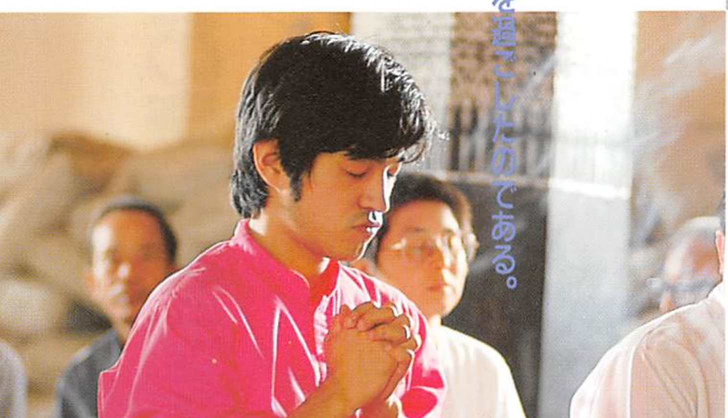






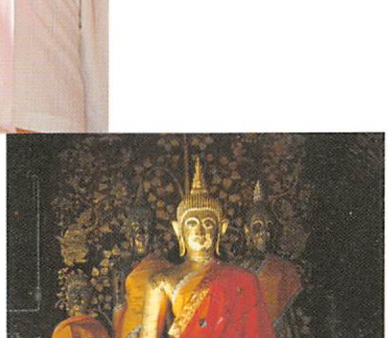
多くの人たちはこう主張するかもしれない。
しかし、心を統御してサマディに入った魂は、
水も食も全く取らず、
呼吸さえ常人の五分の一程度で過酷な五日間を過ごしたのである。
すべては心の現われである――
〝真理〟の根本的な教えは、ここに証明された。





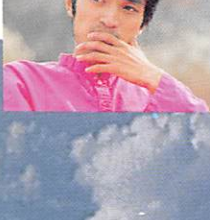
つまり、すべては心、これがすべてを決定しているのである。
「心がどうなろうと人間が生きるためには呼吸が必要だ」
「心がどうなろうと人間が生きるためには食が必要だ」











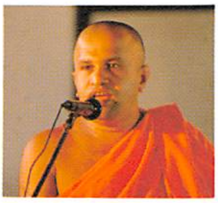


DOCUMENTARY
UNDERGROUND SAMADHI 1991

ザ・サマディ PART II

実録：アンダーグラウンド・サマディ1991





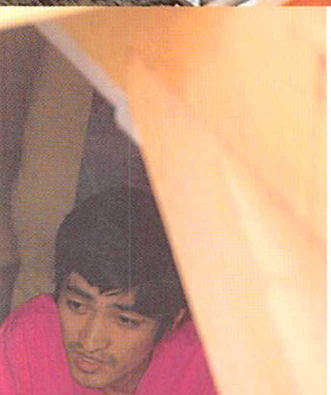




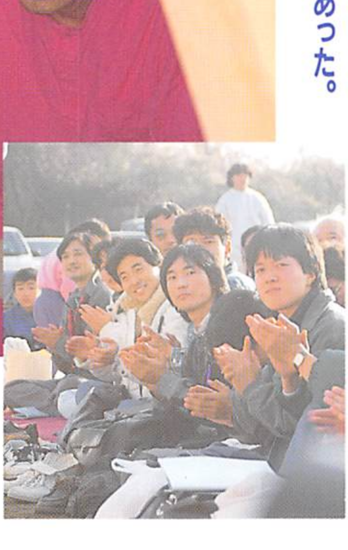


証明された解脱者の奇跡！

地中に埋められたチェンバーで、水なし、食べ物なし、空気なしの五日間

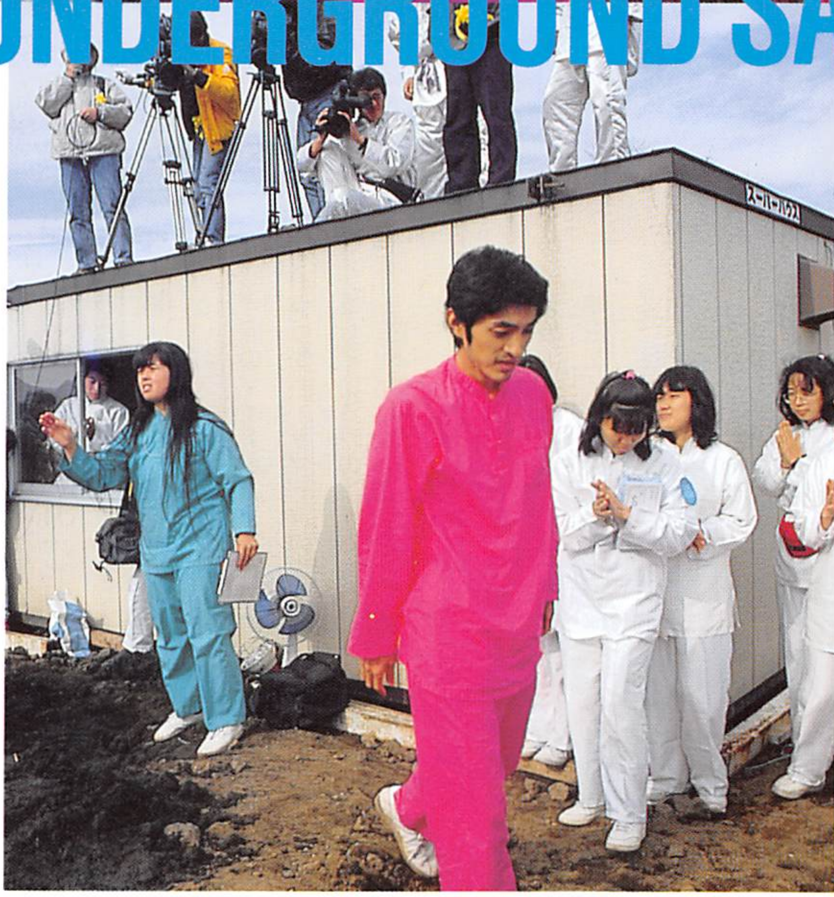


現代科学の常識からいえば、
結論はやはり百パーセント〝死〟なのだろう。
しかし、麻原彰晃尊師に導かれるようにチェンバーから出てきた
愛弟子、マイトレーヤ正悟師は、
我々の見ている前で、自らの足で一歩また一歩と力強く歩き出した。
マスコミも注目する中で行なわれた
五日間、百二十時間にわたるアンダーグラウンド・サマディ――
その成功は、彼自身の解脱者としての証明に他ならない。
そして同時にそれは、
「呼吸を含めたすべては心の支配下にある」という
麻原尊師が説かれる〝真理の教え〟が
科学的に証明された瞬間でもあった。

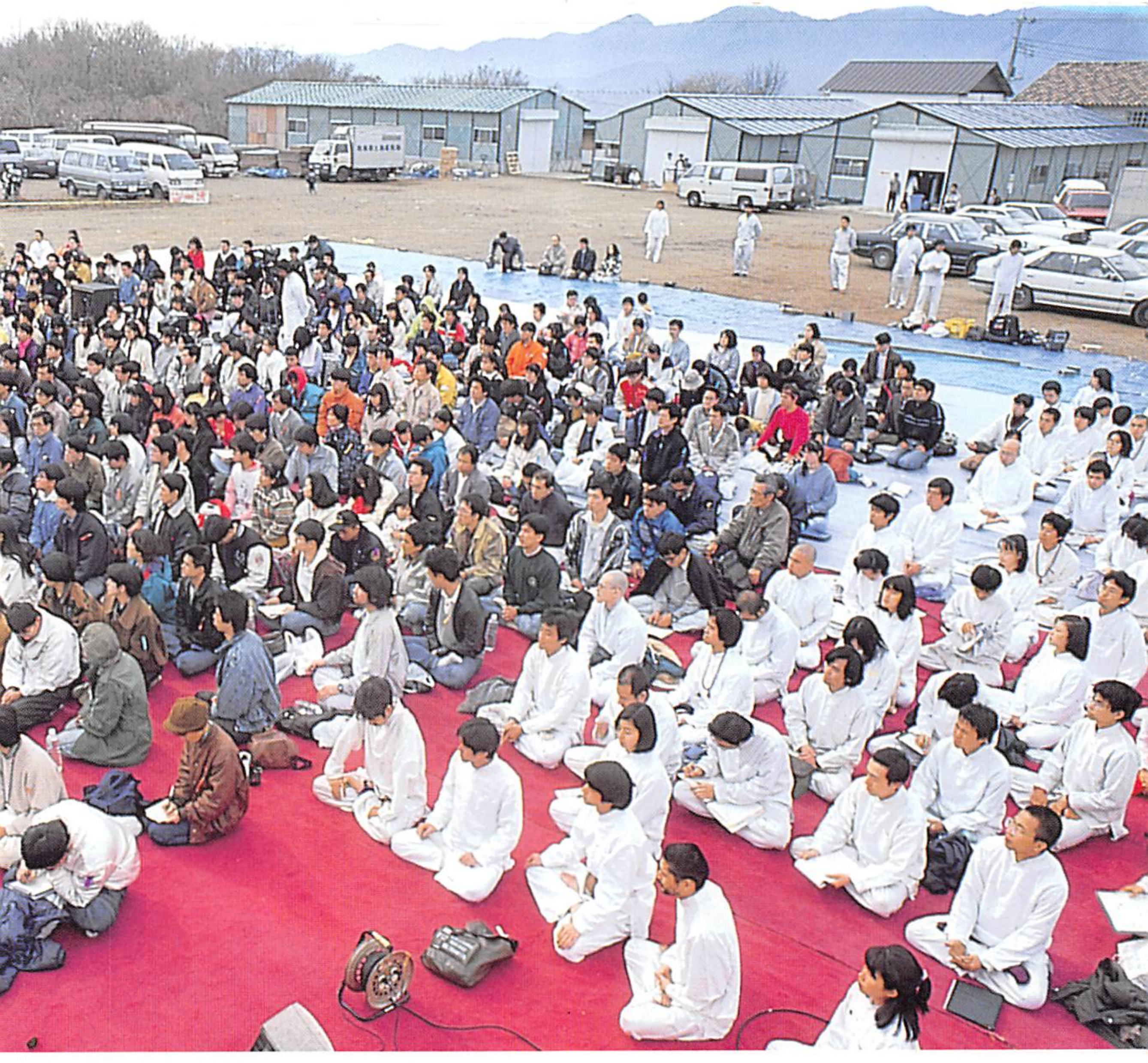




UNDERGROUND SAMADHI







一九九一年十一月十七日、アンダーグラウンド・サマディの会場となった山梨県・上九一色村上空は、早朝からいつにない好天に恵まれていた。それはまるで今回のマイトレーヤ正悟師のアンダーグラウンド・サマディの成功を一足早く祝福しているかのようだった。

日本では別名〝三昧〟とも呼ばれるサマディ。簡単に要約するならこれは究極の瞑想状態のことで、段階によって微妙に異なるものの、肉体的には呼吸や心臓停止など生理機能の停止を伴うものである。すなわち、煩悩に振り回されず、心が肉体を支配する解脱した状態だからこそ可能で、サマディに入れるか否かは、いわば解脱者の証明でもある。

今回、オウム真理教の麻原彰晃尊師の愛弟子、マイトレーヤ正悟師がマハー・ムドラーの成就、仏典でいうところの供養値魂（個の完成をなした阿羅漢）という自らのステージを証明すべく、地中に埋められたチェンバー（部屋）でこのサ







マディに挑戦されたのはさかのぼること五日前のことだった。

　午前十一時三十分、オウム真理教関係者、ＮＨＫや日本テレビなどの取材陣合わせておよそ六百人が集まった会場に麻原彰晃尊師が姿を現わされると、拍手の渦が巻き起こる。そして、壇上に上がられるや麻原尊師は、高らかにこう宣言された。

「それではこれから、正味五日、偉大なアンダーグラウンド・サマディをなしたマイトレーヤ正悟師の土払いの儀式を執り行ないたいと思います。」

●マイトレーヤ正悟師プロフィール

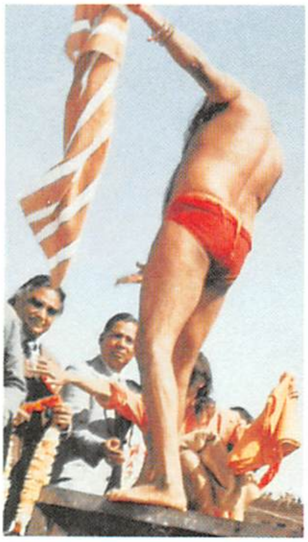
元宇宙開発事業団勤務。将来を約束されたエリートコースを捨てて修行の道に入り、1987年クンダリニー・ヨーガを、89年にはマハー・ムドラーを成就。個の完成を果たし、仏典でいうところの供養値魂（阿羅漢）のステージに至る。優れた思索力には特に定評がある。なお、ホーリー・ネームの「マイトレーヤ」は、伝説の未来仏の名に由来。

サマデイの第一人者、パイロット・ババを越える過酷な挑戦

ここでアンダーグラウンド・サマディについて、もう少し詳しく述べておくことにしよう。

今回の実験のために特別に用意されたチェンバー。これは一辺が三メートルで、地中に埋められたときにできる二十七立方メートルの空間には限られた酸素しかなく、計算によれば、一般人ならわずか三日で確実に死に至るものだった。この恐怖の空間で、五日間、百二十時間にわたり、なおかつ断水断食で過ごすことで解脱者の証明を果たそうというのが今回の実験の目的だった。現代科学の常識から考えれば結論は百パーセント〝死〟なのだから、「無謀な実験」といわれてもそれは当然だろう。

ちなみに、このアンダーグラウンド・サマディは、インドの有名なヨーガ行者、パイロット・ババが、数年前に同じ山梨



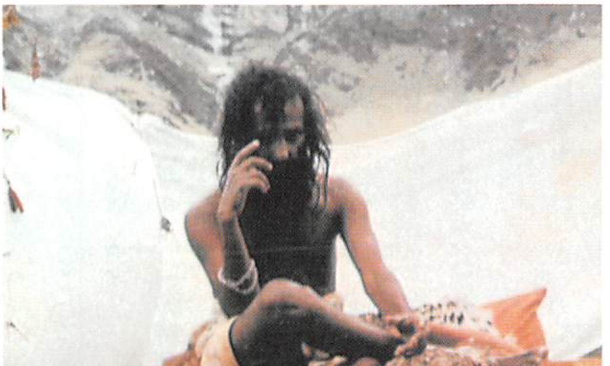






で全く同様の条件で挑戦しているという事実がある。
　インド政府からマハリシ（大聖者）の称号を贈られたパイロット・ババは、ビハーの王家の血筋を引いて生まれ、若いころはインド空軍に属し、戦闘機のパイロットとして大活躍した。特に、対中国、パキスタン戦争では高い功績を上げ、勲章も受けている。
　その彼に突然の転換期が訪れたのは、一九七一年のこと。指令官という権威ある立場にあった彼は、名誉も収入にも友人にも恵まれていた豊かな生活を捨て、ヒマラヤの洞窟の中で激しいヨーガ修行に打ち込み始めた。生涯の師であるハーリー・ババとの運命的な出会いによって、「真実のものを知ったから」というのが彼がヨーガ修行に入ったきっかけと伝えられている。
　以後、七年間激しい修行に打ち込んだ彼は、ヒマラヤでラージャ・ヨーガを修めた後に、「人々の心に宗教心を芽生え

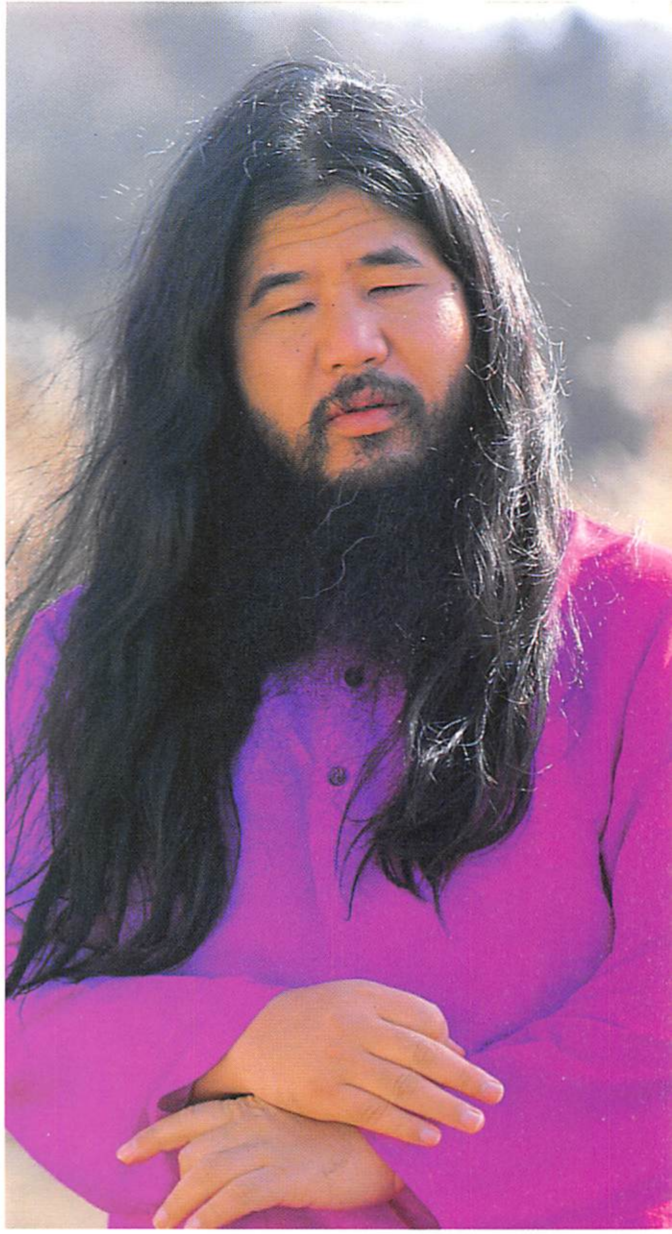






させよ」とのハーリー・ババの命を受けて、国内外でサマディ実験を公開し続けることで大衆にヨーガへの興味を持たせようと努力してきた。

このサマディの第一人者といわれるパイロット・ババでさえ、数年前、日本において同じ条件下でアンダーグラウンド・サマディを行なったときは、五十時間の挑戦だったのである。今回の五日間、百二十時間という数字がいかに厳しいものか、この比較からもご理解いただけるだろう。



奇跡の瞬間！

話を十一月十七日のサマディ会場に戻そう。

この日のために特別に用意された綺麗に装飾されたスコップを使い、スタッフの手でチェンバーの入り口上部の土が除かれたのは、麻原尊師の挨拶から十分後の午前十一時四十分のことである。さかのぼること五日前、チェンバーのハッチが閉じられ土がかけられた時刻に合わせてのオープンとなった。

暗闇で五日間を過ごされたマイトレーヤ正悟師を気遣ってのことだろう。土の中から現われたチェンバーのハッチは、ゆっくりと時間をかけて慎重に上げられていった。その姿が昼間というのに肌寒い十一月の高地の天気と妙にマッチしていて、見る者にいっそうの緊張感を誘っているようだった。

酸素濃度等の計測のために隣接されたプレハブの屋根上から、次の瞬間、五日ぶりに光を吸い込むチェンバーの中に視線を落とすと、蓮華座を組みながら瞑想を続けるワイン・レッドのクルタに包まれた姿が目に飛び込んできた。表情までは確認できなかったが、周囲の喧騒にも微動だにしない姿は、一つの偉業を達成された威厳さえ感じさせている。



さらに、緊張の面もちで関係者がチェンバーの入口の周り、やや遠めに円陣を組むように見守る中、愛弟子を迎えに麻原尊師自らがチェンバーに入られる。この五日間の報告、そして感想をうれしそうに聞かれる尊師。一方、身振り手振りを交えながら話されるマイトレーヤ正悟師の姿をはるか上方で目にした瞬間、このアンダーグラウンド・サマディが大成功のうちに終わったことをうかがい知ることができたような気がする。

正午ジャスト——。麻原尊師からやや遅れて、ワイン・レッドのクルタに包まれたマイトレーヤ正悟師がチェンバー内に掛けられているはしごをゆっくりと上る。そのとき、初めて五日ぶりに見る正悟師の顔が我々の目に飛び込んだ。五日間にわたる断水断食の直後だけにさすがにほおの肉は落ち、やせ細ってはいるものの、大観衆を前に照れくさそうはにかみながら笑う笑顔は、いつも目にしていた彼の笑顔そのものである。

現代科学の常識からいえば、結論はやはり百パーセント〝死〟なのだろう。仮に一般人が同じ条件で五日間を過ごすとしたら、それ以前に、飢えと渇きに苦しみ、さらに酸素がなくなっていく恐怖の前に発狂してしまうに違いない。

しかし、笑顔の麻原尊師に導かれるようにチェンバーから出てきた彼は、我々の見ている前で今、自らのその足で力強く歩き出したのである。一歩一歩と力強く踏み出す足元は、我々と何ら変わりない、まさに健康な人間そのものの足取りだった。

山頂を雪に覆われた富士山を背後に眺める会場に、割れんばかりの歓声とともに、いつ鳴りやむとも知れない称賛の大拍手が響く。マスコミも注目する中で行なわれた五日間、堂々百二十時間にわたるアンダーグラウンド・サマディは、ここに成功したのである。

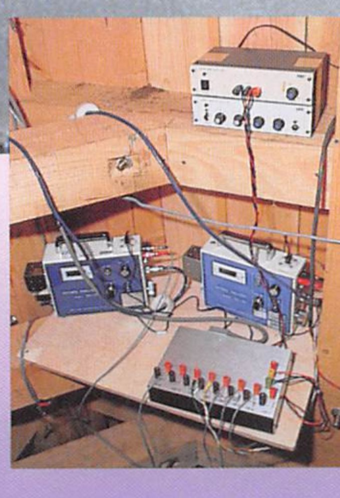
それは麻原尊師が、そしてオウム真理教が〝解脱者〟と呼ぶ者が、本当の意味で、人間の持つ能力をはるかに超えた驚くべきスーパー・パワーの持ち主であることの証明を意味していた。そして同時に、「すべては心の現われである」「呼吸を含めたすべては心の支配下にある」という仏教の、麻原尊師が説かれる〝真理の教え〟、オウム真理教の教義が、科学的に証明された瞬間でもあった。

数字が語る解脱者パワー！

アンダーグラウンド・サマディ
計測データ一挙公開！



サマディの特徴の一つ、呼吸停止。
今回のアンダーグラウンド・サマディでも、
計測データはこの呼吸停止の事実を確実にとらえていた。
一般人には恐怖の五日間を
いったい解脱者はどのように過ごしていたのか？
酸素濃度、二酸化炭素濃度の計測結果から
探ってみることにしよう。







●余裕の五日間

密閉されたチェンバーの中で五日間を過ごされたマイトレーヤ正悟師。これは常人ならもちろん死を意味する数字だが（表2参照）、常人を超えたスーパー・パワーの持ち主である解脱者の前には余裕の五日間だったことが計測データにもはっきり現われている。

例えば、五日間のトータルでの傾向が一目でわかるグラフ1をみても一目瞭然だが、酸素消費をとっても一般人とは比較にならないほどなだらかな線を描いている。

「開始直後は、周りにたくさんの人がいてなかなかサマディに入れませんでした。最初の十二時間はおそらく、ほとんどサマディに入れなかったと思います。」（マイトレーヤ正悟師）　この言葉どおり初めの十二時間こそ数字は不安定だったが、それも後半に向かうに従って徐々に安定。表1の対比表から単純に結論を下せば、五日間を過ぎた段階で一般人のほぼ一日分の酸素しか消費していないことになる。計測データから算出された正悟師の五日間の平均酸素量は61・5㎤／min。やはり一般人の285㎤／minをはるかに下回る驚異的な数字を示している。

ちなみに、グラフ1によれば、二十四時間を過ぎるころまで酸素濃度の数値に極端なばらつきが見られるが、これは正悟師がチェンバー内で電気ストーブをつけたり消したりしていたために起こった急激な温度変化がもたらしたもの。温度補正を行なったがあまりに変化が激しく、正確な補正ができなかった影響にもよる。それ以降については、室温がほぼ一定に保たれていたため、温度の変化による酸素濃度は補正可能の範囲内であるため特に問題はない。

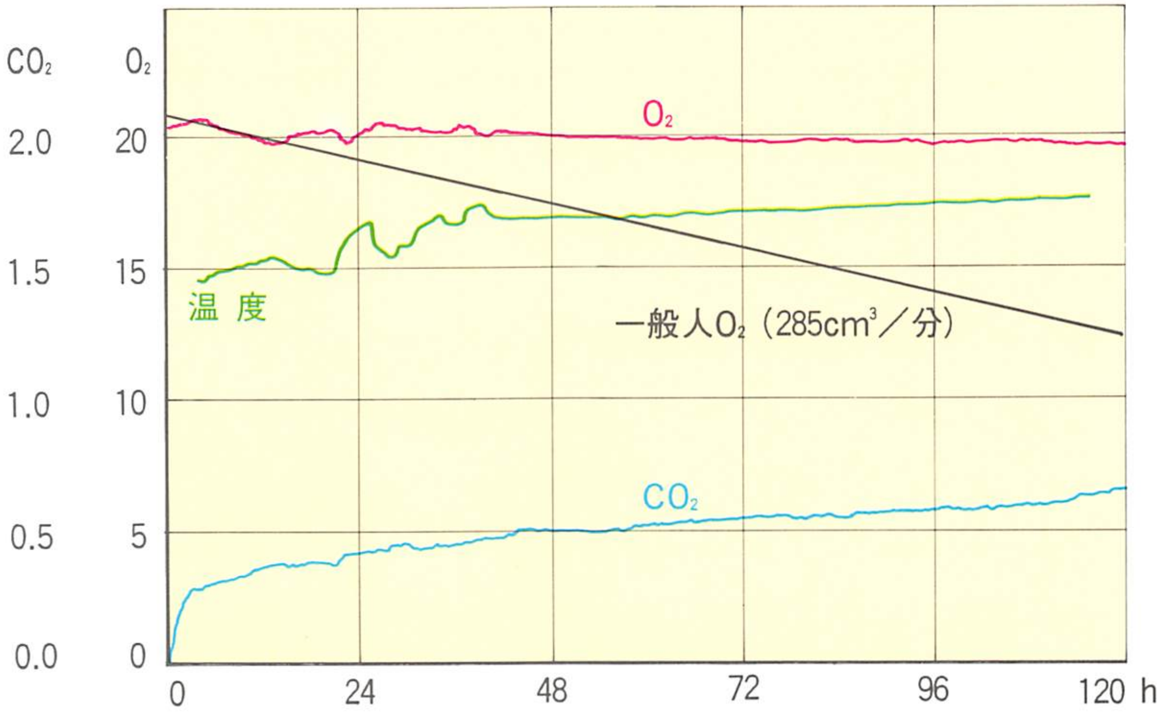
一方、二酸化炭素量もグラフ一のようになだらかな上昇を示し、まるまる一日という長期にわたったものこそないが、短期、中期的なサマディを繰り返している様子がはっきりとわかる。

●ハンデをものともせず

ところで、今回サマディの会場となった山梨県・上九一色村は標高一千メートルを超える高地で、酸素濃度が標高〇メートルの場合の八七パーセントと、かなりのハンデを背負っての挑戦だった。にもかかわらず、これだけのすごい数値を残されたのは、ステージの高さもさることながら日々の修行の賜に他ならないだろう。

以下、チェンバー内でのマイトレーヤ正悟師の様子が詳しくわかるように二十二ページ以降、酸素濃度、二酸化炭素濃度の変化を克明に追ったグラフを掲載した。ぜひグラフの動きを眺めながら、解脱者の力のすごさを想像していただきたい。

グラフ１　酸素濃度・二酸化炭素濃度表



※酸素濃度、二酸化炭素濃度とも補正後の数値。なお､酸素については当初､電気ストーブをつけたり消したりの状態で変化が激しく、温度補正を行なったが数値にばらつきが出てしまった。

表２　酸素濃度とそれに伴う症状

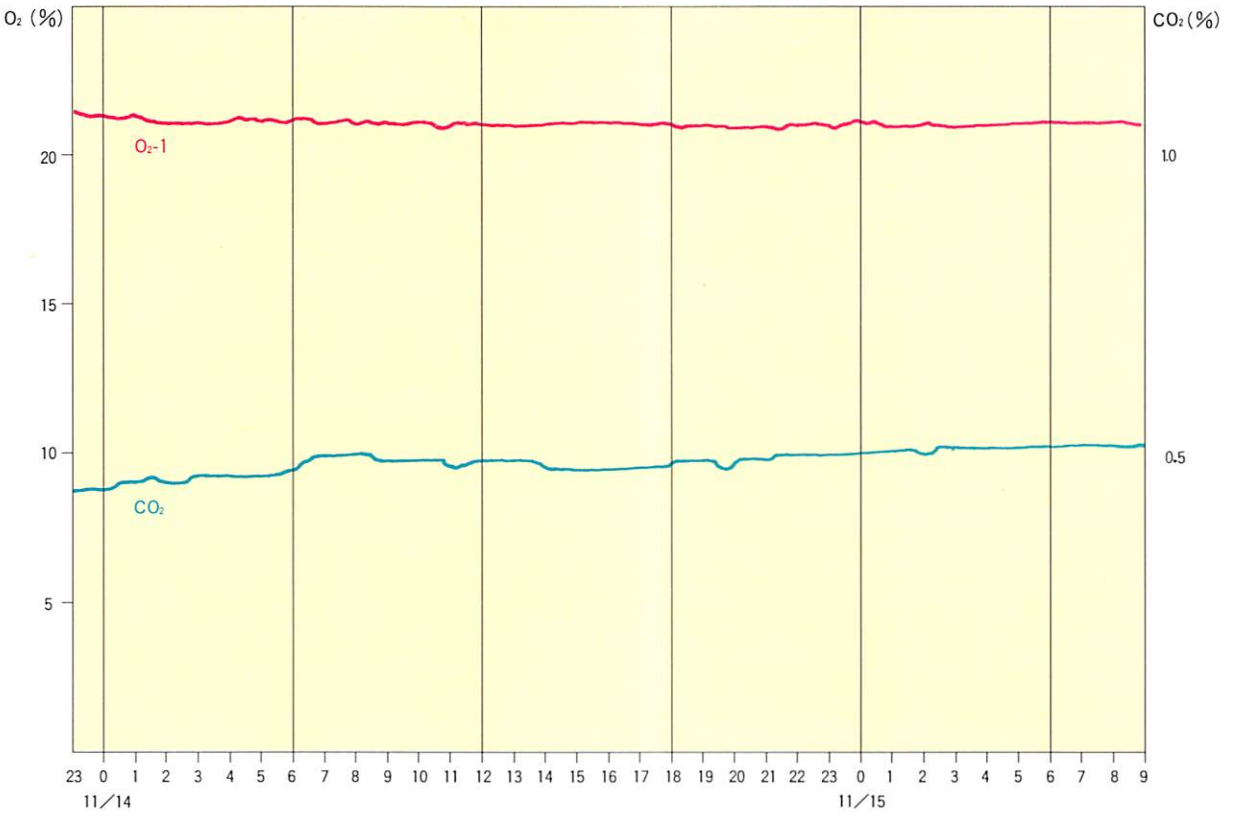
空気中の酸素濃度(％)	症　　　　状
18.5	頭痛、不安、呼吸・脈拍増
16.1	視力障害、意識混濁、吐き気
13.9	筋けいれん、墜落、呼吸困難
11.5	顔面蒼白、意識不明
9.2	昏睡、８分で死亡
6.9	呼吸停止、即死

※今回サマディを行なった場所は高地のため、単位体積中に含まれる酸素分子の数は標高０メートルの場所の87％。その点を考慮してここでの数値は会場の条件に合うように換算されている。

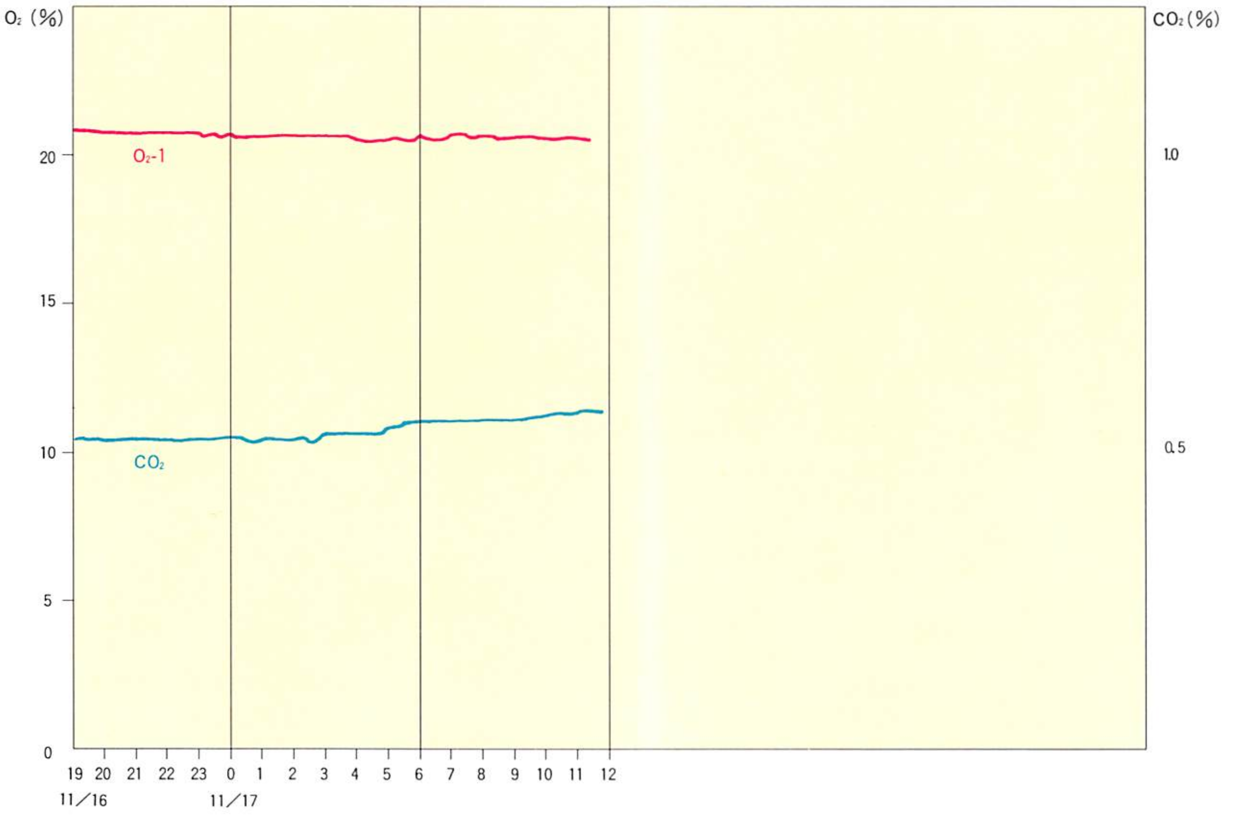
表１　マイトレーヤ正悟師と一般人のサマディ室内の酸素濃度変化比較

経過時間(時間)	マイトレーヤ正悟師(％)	一般人（％）
0	20.9	20.9
24	19.9	19,1
48	19.7	17.4
72	19.4	15.6
96	19.2	13.9
120	19.0	12.1

※一般人は座っているときの酸素消費量を285㎤／minで計算）

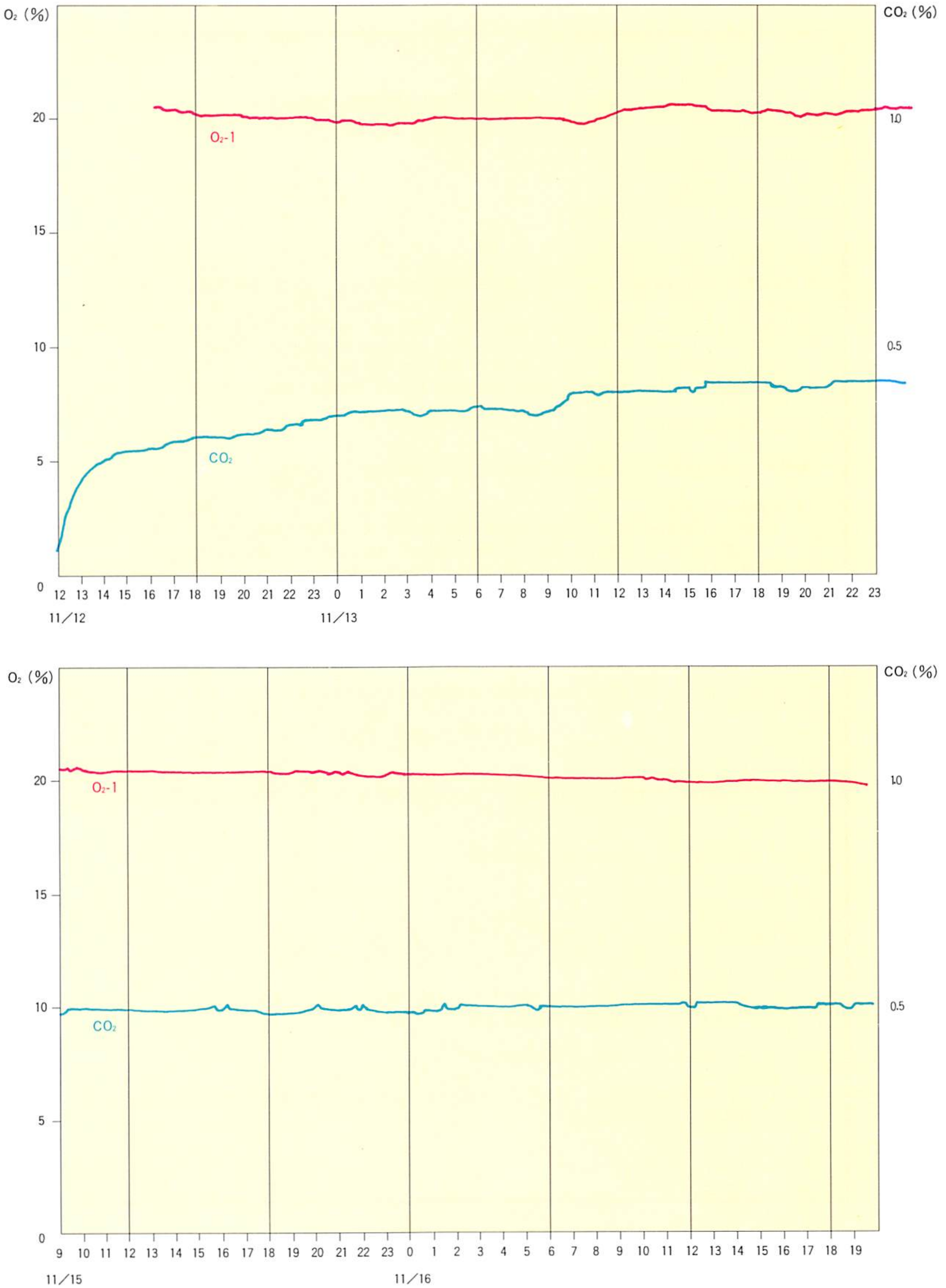


O2 (%)
CO2 (%)
O2-1
CO2
20
15
10
5
1.0
0.5
23 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9
11/14
11/15



O2 (%)
CO2 (%)
O2-1
CO2
20
15
10
5
0
1.0
0.5
19 20 21 22 23 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12
11/16
11/17

図 3　酸素濃度・二酸化炭素濃度



参考資料　酸素濃度・二酸化炭素濃度の測定方法

計測器 → アンプ → ＡＤコンバーター → コンピューター

測定フローシート

酸素濃度、二酸化炭素濃度とも、サマディ室中の全気体分子数に対する分子数の割合を測定した値である。
計測方法については、計測器からのアナログ出力をアンプで増幅し、ＡＤコンバーターでデジタル信号に変換。そのデータをコンピューターで処理した。データ処理は、計測器からの出力を約１.５秒間に200回サンプルし、その平均値をとるようにしている。なお、この測定は約12秒に１回なされた。
ちなみに、測定器は、サマディ室の床から約１･５メートルの高さにセットしている。
なお、数値については、酸素濃度、二酸化炭素濃度とも次のような補正を加えている。

●酸素濃度数値の補正

酸素濃度＝温度補正された値×分圧補正係数×ドリフト補正係数

ａ.温度補正された値
今回使用した酸素計測器は、温度変化の影響を受けるので、メーカーの温度補正表により補正した。しかし、温度変化が激しい初日は、気温と測定器の温度が一致しないので、正確な補正が不可能だった。

ｂ.分圧補正係数
密閉室内で温度が変化すると、酸素の分圧（酸素分子による圧力）が変化するために、測定値は影響を受ける。

分圧補正係数＝（273＋12.4）／（273＋温度）

$$= \frac{\text{初期に測定器を更正した温度（12.4°C）での分圧}}{\text{測定するときの温度での分圧}}$$

ｃ.ドリフト補正係数
サマディ終了後、測定器が、初期更正値より１.４％高い値を示したので、測定値は120時間で、１.４％ドリフトするとし、各測定時間での補正をする。

ドリフト補正係数＝１－0.014×（経過時間／120）

●二酸化炭素濃度数値の補正

二酸化炭素濃度＝測定値×ドリフト補正係数

ａ.ドリフト補正係数
サマディ終了後、測定器が、初期更正値より７.８％低い値を示したので、測定値は120時間で、７.８％ドリフトするとし、各測定時間での補正をした。

ドリフト補正係数＝１＋0.078×（経過時間／120）

なお、二酸化炭素濃度計測器は、防音のために箱の中に入っていたので、温度が一定の状態と考えられたためその他の補正は加えていない。

SCIENTIFIC PROOF



詳解！これが解脱者の証明 "サマディ"のすべてだ！

今回のアンダーグラウンド・サマディの成功は
マイトレーヤ正悟師の解脱者の証明とともに、
一方で、仏典にも記されているサマディ(＝三昧)の
存在そのものを証明することになったのはいうまでもない。
ところで、サマディとはいったいどのようなものなのか？
ここではサマディのすべてを明らかにする。

サマディとは？

まずは耳慣れないサマディという言葉の明確な定義からである。サマディという言葉はサンスクリット語で、死の状態を意味している。

次いで、科学的な定義を明らかにするならおよそ二説に大別され、第一は「完全なる呼吸停止と完全なる心臓の拍動停止の状態」、そして、第二は完全なる呼吸停止の方は同じだが、「心臓は微拍動している状態」を指す。現代のインド・ヨーガの研究では、後者が正統とされているようである。

仮に、ここに一人の修行者がいて瞑想修行を行なっていたとしよう。彼が単なる瞑想状態かサマディに入っているのかは、端から見ただけではもちろんわからない。しかし、外見はともかく、肉体、そして意識においても、単なる瞑想状態とサマディに入っている状態では明らかな違いが見られる。

例えば、肉体レベルの相違点であるが、瞑想とサマディでは次のような違いがある。

①呼吸状態……瞑想状態では静かな呼吸を繰り返すが、サマディにおいては呼吸停止が訪れる。

②心拍数……心臓の停止ないし微拍動によってサマディでは心拍数が測定不能ないし激減するのに対して、瞑想状態では平常時と比べて著しい変化は見られない。

③新陳代謝……瞑想では大きな変化は見られないが、サマディでは代謝が著しく低下する。

一方、意識における相違点は、これは経験的にしか述べられないため違いを明らかにするのは難しいが、瞑想時は自己の煩悩、カルマのエネルギー（ストレスとでもいったらわかりやすいかもしれない）に押し流された状態、つまり、雑念に流された状態であるのに対して、サマディではこうしたものに左右されない絶対的な自由・幸福・歓喜の状態を伴うとしておこう。

つまり、意識の点はともかく、端から見れば全く同じに思える瞑想とサマディも、肉体レベルではかなりの違いが見られるのである。

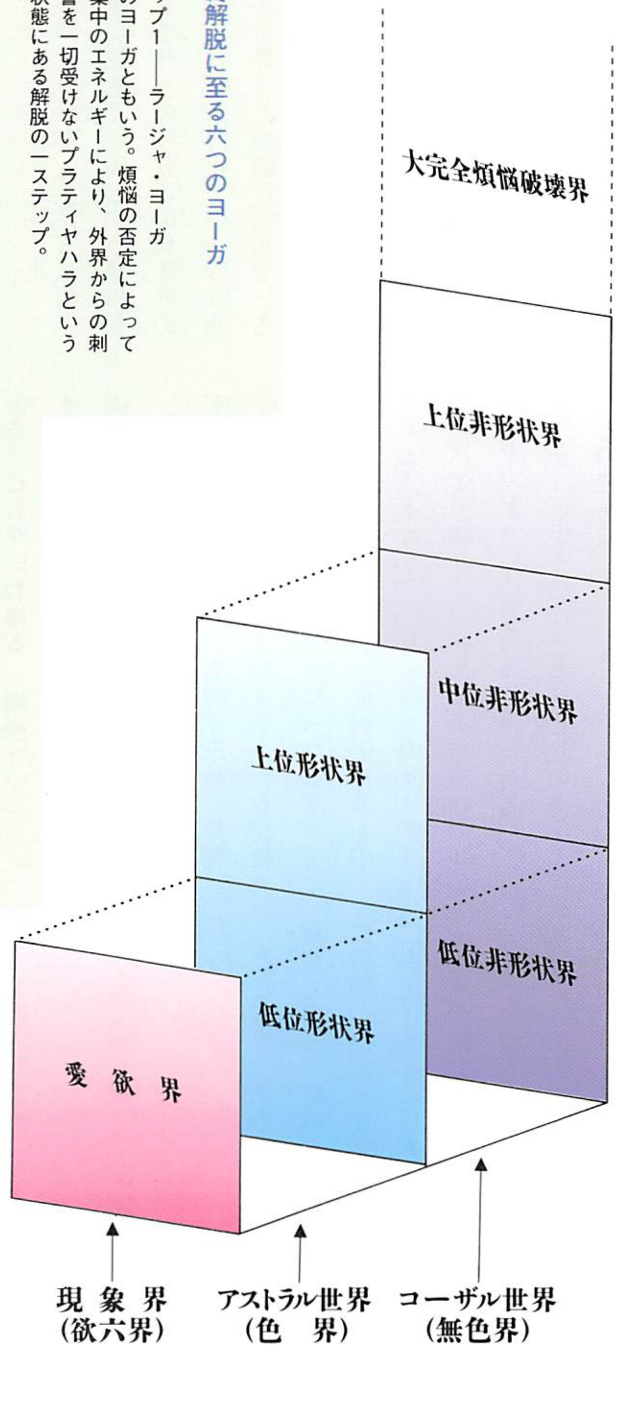


サマディの段階

最古にして最高のヨーガ教典、パタンジャリの『ヨーガ・スートラ』によれば、ヨーガ修行のステージには三つの段階がある。精神集中（ダラーナ）、瞑想（ディアーナ）、超覚醒（サマディ）でこの三つをもって広義の意味で「サマディ」という言葉が用いられている。

三つのサマディに入れる条件は、ラージャ・ヨーガ、クンダリニー・ヨーガ、ジュニアナ・ヨーガの各ヨーガの修習である（別項参照）。具体的には、ラージャ・

全宇宙の構造



●最終解脱に至る六つのヨーガ

◎ステップ1――ラージャ・ヨーガ
意志のヨーガともいう。煩悩の否定によって生じる集中のエネルギーにより、外界からの刺激や影響を一切受けないプラティヤハラという制感の状態にある解脱の一ステップ。

◎ステップ2――クンダリニー・ヨーガ
エネルギーのヨーガ。尾てい骨に眠るクンダリニー・エネルギーの覚醒・上昇により煩悩を昇華し、安定した心の状態を保っている解脱の一種。エネルギー・ロスがない限り、煩悩に左右されない状態にある。

◎ステップ3――ジュニアーナ・ヨーガ
分析のヨーガ。物事をありのままに見つめる純粋観照智により、自らの煩悩を原因レベルにまでさかのぼって分解する、煩悩に全く左右されない解脱の状態。仏典でいうところの「供養値魂（阿羅漢）」を指す。マハー・ムドラーと同様のステージである。

◎ステップ4――大乗のヨーガ
三つのヨーガの成就をベースに、四無量心（慈愛・聖哀れみ・聖称賛・聖無頓着）の実践により自他の区別さえ滅している解脱者。この大乗のヨーガが完成すると、この現象界に再生するカルマは消える。

◎ステップ5――アストラル・ヨーガ
報身のヨーガともいう。現象界の裏にある純粋アストラル世界で活動する「報身」といわれる身体に自由に意識を移し変えることができる。アストラル・レベルでカルマを消滅させることができるので、この段階まで来ると「魂の救済意欲」以外にはまったく執着がなくなる。

◎ステップ6――コーザル・ヨーガ
いわゆる真解脱の状態。純粋コーザルの世界で活動する意識だけでできた身体、「本性身」に到達し、コーザル・レベルでデータの入れ替えが行なわれる。すなわち、このヨーガの完成が再生される因を全く持たない最終解脱の状態である。ちなみに、コーザル世界まで到達するには最低三時間以上のサマディが必要とされている。

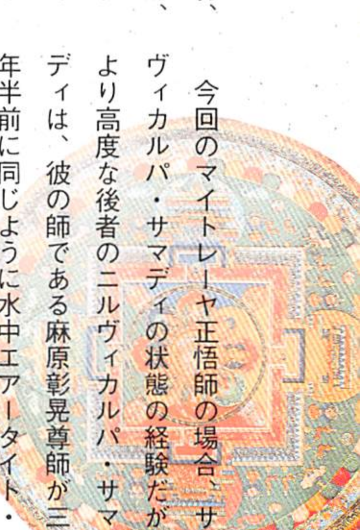
ヨーガを修習すると、ダラーナに入れるようになり、同様に、クンダリニー・ヨーガでディアーナ、そして、ジュニアーナ・ヨーガで超覚醒のサマディに至るわけである。

　さらに細かく見ていくと、この超覚醒もまた、大まかに二つのサマディに分類できる。これがサヴィカルパ・サマディとニルヴィカルパ・サマディの二種類である。

　サヴィカルパ・サマディというのは、自分がこの世に生きているという意識が存在したままで我々の住むこの現象界の裏側にある世界、つまり、アストラル世界、コーザル世界へと意識が飛んでいる状態である。このとき呼吸や心臓は完全に停止し、肉体は仮死状態となる。これは、いわゆる「死後涅槃」に達するものである。

　これに対し、ニルヴィカルパ・サマディの場合、その違いは意識そのものが既に涅槃の状態にある。涅槃にあって、この現象界、その裏側にあるアストラル世界、コーザル世界のすべてが経験できるのが、このニルヴィカルパ・サマディというわけだ。このサマディに入れるステージでは、呼吸停止のまま、肉体を動かしたり話したりすることが可能となる。すなわち、このステージに達すると、魂の本質である真我のオーダーによって自由にイメージや肉体を操ることができるわけである。これがいわゆる「現世サマディ」または「現世涅槃」といわれる状態である。

　ちなみに、『ヨーガ・スートラ』には有想三昧、無想三昧、有種子三昧、無種子三昧というサマディのステージも記載されているが、これら一つ一つはすべてサヴィカルパ・サマディに対応するものである。そして、これら四つのサマディをすべてを終えて、初めてニルヴィカルパ・サマディに入れる。ニルヴィカルパ・サマディというのはそれほど高いステージなのである。



　今回のマイトレーヤ正悟師の場合、サヴィカルパ・サマディの状態の経験だが、より高度な後者のニルヴィカルパ・サマディは、彼の師である麻原彰晃尊師が三年半前に同じように水中エアータイト・サマディで解脱者の証明を果たされたときに見せている（別項参照）。そして、おそらくこのニルヴィカルパ・サマディに入れるのは現在、我々の知る限り世界中でも麻原尊師だけだろう。

麻原尊師が語る サマディの段階

　ところで、その麻原尊師が仏教経典の研究と自らの経験から、サマディを明確に分類した記事を発表しているのでここに引用させてもらおう。

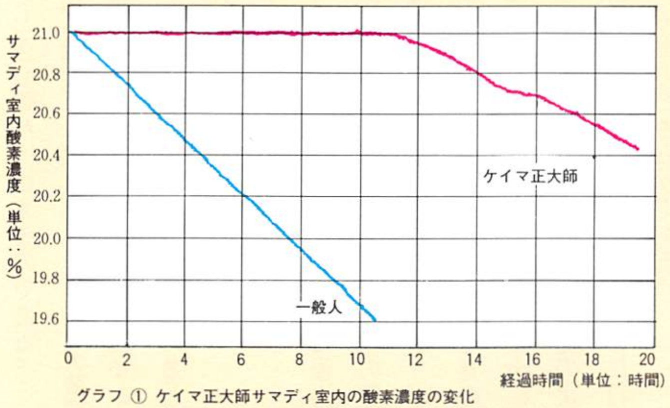
《心臓の拍動とは意識の働きを表わしている。よって、この欲界を完全に越えるサマディに入った場合のみ、つまり粗雑な元素でできている心臓から意識が超越

●ニルヴィカルパ・サマディの証明

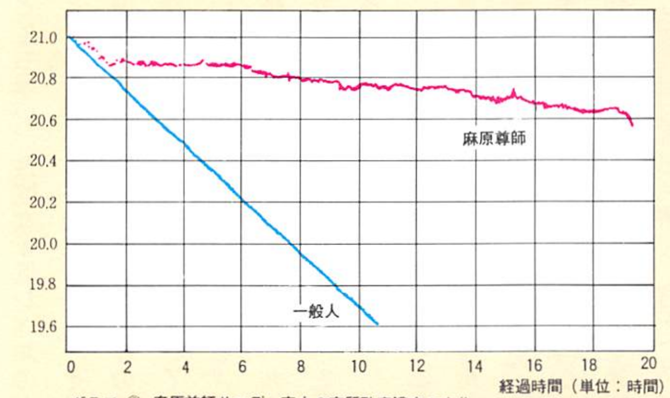
　さかのぼることおよそ三年半前、麻原尊師は静岡県富士宮市のオウム真理教富士山総本部道場敷地内において、愛弟子のマハー・ケイマ正大師と水中に用意された二十七立方メートルのチェンバーでやはり解脱者の証明をすべくサマディの実験に挑戦された。

　実験そのものはチェンバー内から発生する有毒ガス、あるいは直前に内部をストーブで乾かしたために水槽そのものが酸素を消費するハプニングなどがあり二十時間ほどで中止せざるを得なかったが、補正されたデータから麻原尊師の驚異のサマディの成功が証明された。一方、愛弟子マハー・ケイマ正大師も十二時間連続無呼吸を記録。解脱者の証明を果たしている。

　ちなみに、このとき麻原尊師は、サマディの最中に頻繁にインターホンで酸素消費等のデータ確認のために外部と連絡を取っていた。「なぜサマディに入っているのにできるの?」と不思議に思った方も多かったが、まさしくこれが呼吸停止のまま、肉体を動かしたり話したりすることが可能となる、ニルヴィカルパ・サマディの証明だったわけである。



グラフ ① ケイマ正大師サマディ室内の酸素濃度の変化
（1988年５月17日、静岡県富士宮市オウム真理教総本部道場）
装置の構成…サマディ室３×３×2.4ｍ、実質内容積20.0㎥



グラフ ② 麻原尊師サマディ室内の実質酸素濃度の変化







したとき心臓が停止するのである。

『神聖綱経』（編集部注＝『南伝大蔵経』長部経典）において、欲界を経験するサマディは、大別して四つに分かれると説かれている。これは正しい。

下から順に説明しよう。

人間の意識レベルをそのままに温存し、その意識の深い状態に入り、現象の整理と検討、熟考によって得るサマディが一番下のサマディであるが、このときの呼吸はほとんど停止しているか、完全に停止している。しかし、心臓は早鐘のように打っているか、ややゆっくりめに打っているかのどちらかである。

また、このとき行なわれた検討・熟考の結果は、呼吸の停止が完全になされている場合のみ、正しいものであるといえる。ただし、それは、大変短い時の流れにおいてである。

それは、人間の意識レベルを抜け出していないからである。考えてみてほしい。例えば、人間の心の変化というものは、とても早い。性欲など低レベルのものなど、その最たるものであろう。その意識の枠組みの中での検討・熟考なのであるから、大変短い時の流れにおいての正しい結果しか得られないのである。そして、精神の集中の長さが人間のレベルを超えたとき、次の段階のサマディへと移行するのである。

次の段階のサマディは下から二番目である。これは、完全なる呼吸停止と、大変静かな心臓の働きを呈するのである。また、このサマディによって得られる体験は、意識が肉体から離れ、意識堕落天（編集部注＝欲六界でいうところのいわゆる阿修羅）へと至るものである。

（中略）

下から三番目のサマディは、戯れ堕落天（編集部注＝欲六界でいうところのいわゆる天界）へ至るサマディである。このとき、呼吸は完全に停止し、心臓は遅弱の働きを呈するのである。

（中略）

● 四静慮

仏典に記されている四つのサマディの状態。以下はパーリ語の経典をオウム真理教『南伝大蔵経』翻訳チームが、該当部分を日本語に訳したものである。

向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの静慮がある。それでは、四つとは何であろうか。

向煩悩滅尽多学男は、諸々の愛欲を遠離し、不善の法則を遠離して、有熟考有吟味にして、遠離から生じる喜と楽とがある、第一静慮を具足してとどまる。

熟考と吟味を静止し、心の中を落ち着かせ、心が一点に集中し、無熟考無吟味にして、サマディから生じる喜と楽とがある、第二静慮を具足してとどまる。

喜から離愛著し、無頓着となってとどまり、記憶修習し正智して、身によって楽を覚え、諸々の貴人が『無頓着にして記憶修習がある楽の時を過ごす』と明かす、第三静慮を具足してとどまる。

楽を捨断し苦しみを捨断して、以前の幸福と激痛とを全滅したことから、不苦不楽にして、無頓着と記憶修習による純粋とがある、第四静慮を具足してとどまる。

向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが四つの静慮なのである。

（『南伝大蔵経』「静慮相応」より）



また、この二つの天界は両方とも前述のとおり煩悩を有しているから、心臓の働きは停止しないのである。

第四番目の、すなわち欲界の最高のサマディは、神聖天界へと至るサマディである。

この世界は、性欲、食欲をほとんど止滅しているか、あるいは、完全に止滅している魂の行く世界であるから、心臓は微弱拍動なのである。

そして、現代のインド・ヨーガの最終地点への到達がアートマン（真我＝自己の本質）とブラフマン（神聖天界）の合一であるから、残っている煩悩もわずかとなり、完全な呼吸の停止と、微弱な拍動というサマディの定義が出てくることはうなずけるのである。

ここまでが欲界のサマディによって得られる結果である。そして、この上に光音天からマハー・ボーディ・ニルヴァーナ（大到達真智完全煩悩破壊界）までのサマディが存在するのである。

これらのサマディは、欲界を超越しているから、完全なる呼吸停止と完全なる心臓停止が起きるのである。そのときの心臓停止の仕方は、大きな内的音と同時にロックがかけられたかのようにガクッと止まるのである。》（オウム真理教刊・情報誌『えんじょい・はぴねす』十月号、「宗教は一つの道」から）

サマディの本当の意味

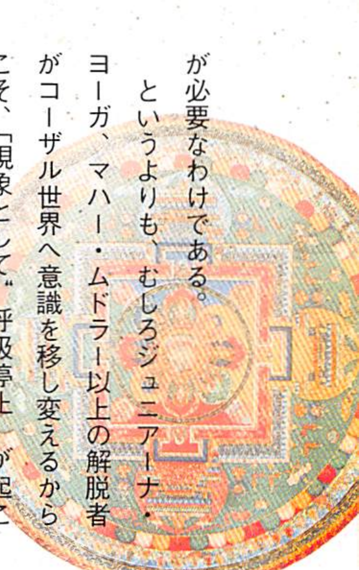
ここからもわかるように、これが「サマディにはジュニアーナ・ヨーガ、あるいはマハー・ムドラーが不可欠」といわれるゆえんでもある。すなわち、サマディには煩悩のコントロールが必要で、そのためには、いわゆる根本煩悩が存在するコーザルをコントロールする力が必要となる。そのためには思索によって煩悩を根本から分解できるジュニアーナ・ヨーガ、あるいはマハー・ムドラー以上の力が必要なわけである。

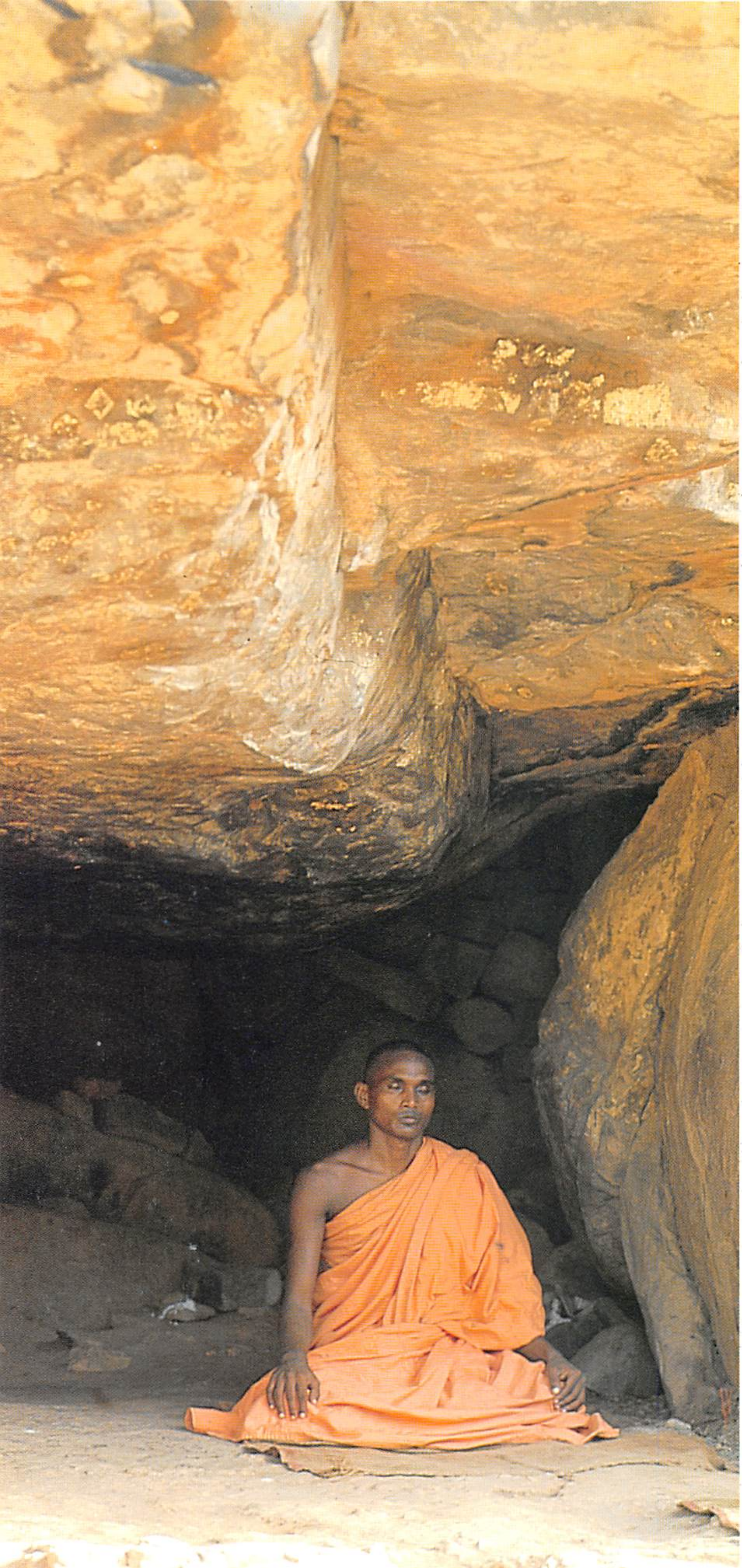
というよりも、むしろジュニアーナ・ヨーガ、マハー・ムドラー以上の解脱者がコーザル世界へ意識を移し変えるからこそ、「現象として"呼吸停止"が起こるサマディに入る」といった方がより正確ではあるが……。

また、心臓の停止も基本的には同様で、ただ、煩悩の程度によって完全停止あるいは微拍動というように微妙に変化するのは、おそらく心臓という部分に我々の魂の本質である「真我」が宿っていることにも関係しているのではなかろうか。

それはともかく、ここまでくればサマディの本当の意味が、おぼろげながらも理解していただけただろう。サマディは解脱・悟りといった修行のプロセスを進める上で、絶対に不可欠なもので、それに伴う現象にすぎないのである。

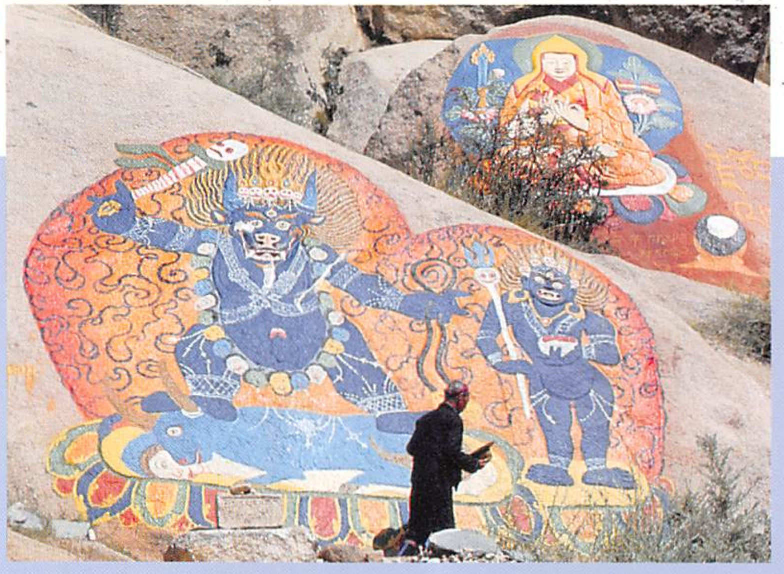
そこで重視されてしかるべきなのは、むしろ内的経験で、深い意識状態に入ったとき意識を別の身体に移し変え、この





現象界の中の人間界以外の世界、さらに、アストラル世界、コーザル世界を体験する。そして、自らの肉体を含めてふだん目にするこの世界が幻影であることを知るのである。さらに、その結果、獲得した智慧と力（神通力＝超能力）により、苦しみの世界に再生する因を知り、またその因を取り除く術を知り、最終的には魂の永遠の願いである絶対自由・幸福・歓喜の世界、マハー・ニルヴァーナへのキップを手にするのである。

真の解脱者のみがなし得る奇跡、サマディ。それはまさに絶対的自由・幸福・歓喜の世界へのステップなのである。



●六つの神通力

正サマディの後にくる正精通によって身につくとされる六つの神通力。オウム真理教『南伝大蔵経』翻訳チームの訳をそのまま引用した。

◎神足通

このように、向煩悩滅尽多学男が四つの如意の基礎を修習し、真面目に行なうならば、様々な性質の如意を経験する。

すなわち、一つがいろいろな形となり、いろいろな形が一つとなり、明らかにテレポーテーションをなし、塀を超え、城壁を超え、山を超え、くっついていないで行くのは例として空間の中のようであり、地に浮き上がったりもぐったりするのは例として水中のようであり、水上を沈むことなく行くのは例として地上のようであり、空間の中を蓮華座で散歩するのは例として翼ある鳥のようであり、このように大いなる如意とこのように大いなる威神力がある、あの月と太陽とを手で触れて磨き上げ、神聖天界にまで、身をもって欲望を満足させることに従事するのである。

◎天耳通

このように、向煩悩滅尽多学男が四つの如意の基礎を修習し、真面目に行なうならば、清浄であって人間を超越した天耳界において、天や人間、あるいは遠くや面前の双方の声を聞くのである。

◎他心通

このように、向煩悩滅尽多学男が四つの如意の基礎を修習し、真面目に行なうならば、他の生命体や他の魂の心によって心を把握して認識し理解する。すなわち、

愛著がある心を愛著がある心と認識し理解する。

愛著を離れた心を愛著を離れた心と認識し理解する。

邪悪心がある心を邪悪心がある心と認識し理解する。

邪悪心を離れた心を邪悪心を離れた心と認識し理解する。

迷妄がある心を迷妄がある心と認識し理解する。

迷妄を離れた心を迷妄を離れた心と認識し理解する。

閉じ込められた心を閉じ込められた心と認識し理解する。

散らばった心を散らばった心と認識し理解する。

大いに広がった心を大いに広がった心と認識し理解する。

大いに広がっていない心を大いに広がっていない心と認識し理解する。

より優れたものを持っている心をより優れたものを持っている心と認識し理解する。

無上の心を無上の心と認識し理解する。

サマディに入った心をサマディに入った心と認識し理解する。

サマディに入っていない心をサマディに入っていない心と認識し理解する。

離解脱した心を離解脱した心と認識し理解する。

離解脱していない心を離解脱していない心と



認識し理解するのである。

◎宿命通

このように、向煩悩滅尽多学男が四つの如意の基礎を修習し、真面目に行なうならば、様々な前世の生き様を思い出す。

すなわち、一生、二生、三生、四生、五生、十生、二十生、三十生、四十生、五十生、百生、千生、十万生、多くの還元期、多くの再生期、多くの還元期と再生期において、

『わたしはあそこでは、このような名前であって、このような家系であって、このような容色であって、このような食物であって、このような楽苦を経験し、このような寿命の最期であった。そして、このわたしは死んだ後、そこに転生した。

そこでも、このような名前であって、このような家系であって、このような容色であって、このような食物であって、このような苦楽を経験し、このような寿命の最期であった。そして、このわたしは死んだ後、ここに転生した。』

と、このように状態と説明とがある、様々な前世の生き様を思い出す。

◎天眼通

このように、向煩悩滅尽多学男が四つの如意の基礎を修習し、真面目に行なうならば、清浄であって人間を超越した天眼によって、生命体の死と転生を見て、生命体が要素の蓄積に従って達し、卑しかったり高貴であったり、器量が良かったり醜かったり、幸福に向かうことであったり悲痛に向かうことであったりするのを認識し理解する。

『尊者よ、確かに、これらの生命体は、身において悪行を具足し、言葉において悪行を具足し、意識において悪行を具足し、聖人を非難し、誤謬見解を抱き、誤謬見解の要素の蓄積を記憶実践した。そのため、その身が終わり、死後、離別であり、悲痛に向かうことであり、破滅である地獄に転生した。

尊者よ、確かに、これらの生命体は、身において善行を具足し、言葉において善行を具足し、意識において善行を具足し、聖人を非難することなく、正見解を抱き、正見解の要素の蓄積を記憶実践した。そのため、その身が終わり、死後、幸福に向かうことである天の世界に転生した。』

と、このように、清浄であって人間を超越した天眼によって、生命体の死と転生を見て、生命体がその要素の蓄積に従って達し、卑しかったり高貴であったり、器量が良かったり醜かったり、幸福に向かうことであったり悲痛に向かうことであったりするのを認識し理解するのである。

◎漏尽通

このように、向煩悩滅尽多学男が四つの如意の基礎を修習し、真面目に行なうならば、諸々の漏を破壊することによって、無漏の心の離解脱や智慧の離解脱を、この世界において、自ら証知し現証し具足してとどまるのである。

(相応部経典・神足相応より)



偉大なる聖者の証！

歴史を見ると、我々は実に多くのサマディの記述にぶつかる。
そして、それらはすべて
〝聖者〟と呼ばれる方によって
なされたという事実に気づく。
つまり、サマディ＝聖者の証というわけである。
ここではサマディに関する代表的なエピソードを紹介する。

❖自ら炎の中に入って身を脱したカルヤーナのサマディ

古代ギリシアの英雄、アレキサンダー大王。幼少のころ大哲学者アリストテレスに師事していた彼は、後にインドの聖者に関心を示し、インド遠征のときに巡り合ったインド・ヨーギを自分のグルにした。その人物がカルヤーナである。

このカルヤーナには、ものすごいサマディのエピソードが残っている。アレキサンダー大王に従ってペルシアにわたった彼は、あらかじめ周囲に伝えておいた日にマケドニア全軍の面前で火葬用の薪の中に座り、なんと自らその老いた身を焼いて肉体を脱したというのである。何の恐怖も見せずに炎の中で身動き一つせず生身を火葬している姿を見て、さすがの無敵軍の猛者たちも驚嘆したそうだ。肉体を心がつくり出す幻影と知る解脱者らしいエピソードである。





❖「国王が生き返った」シャンカラのサマディ

ヴェーダーンタ学派の中の不二一元論派の創始者であり、インド最大の哲学者といわれるシャンカラ。哲学者バーラティとその妻ミトラという著名な二人の学者から論争を挑まれたとき、ある問いに対して返答に窮してしまった。それは恋と性についてのもので、清廉潔白な学僧である彼には、全く知りえないものだったのである。

どうしたらいいかと悩みに悩んだシャンカラ。そんなある日、彼はアマラカという国王の葬儀に出会った。そこで彼は弟子を集めてこういったのである。

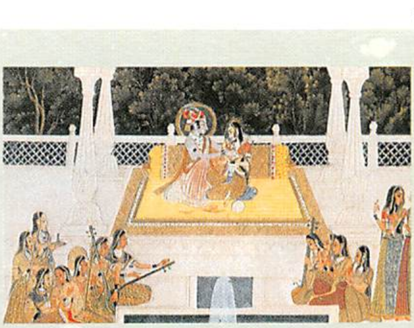
「わたしは二週間の間、この肉体から抜け出す。それはあくまで仮死状態であって死んではいないから、その間この身体をしっかり保管しておいてくれ。」

そういい残して彼はサマディに入り、呼吸も心臓の鼓動も停止した身体を見て、茫然とする弟子たちを残して、アマラカは国王の亡骸に入ったのである。

「国王が生き返った！」

葬儀に参列していた者たちはもシャンカラが乗り移ったアマラカ王の復活に驚いた。中でも喜んだのは王妃で、以前以上の愛をもって国王に献身したのである。

当初の予定どおり、二週間後にシャンカラは国王の肉体を去り、自らの肉体に戻った。その後、シャンカラは再び二人の学者を訪れ、二週間の貴重な体験を生かして恋愛問題を見事に解き明かし、さらに、男女の恋愛について長い論文を書いた。





❖変幻自在ミラレパのサマディ

今なおチベットの人々に愛され続けている偉大なヨーギ、ミラレパ。彼もまたサマディに関して豊富なエピソードを持つ聖者の一人である。以下に挙げる話は、数多く残されているサマディのほんの一例である。

あるときミラレパが洞窟の中でサマディに入っていると、数人の狩人が通りかかった。彼らはミラレパがぴくりともせずに座っているのを見て驚きこう尋ねた。

「おまえは人間か、それとも幽霊か。」

しかし、一言も発せず、不動の姿勢を崩さなかったミラレパ。不審に思った狩人たちは毒矢を彼に向けて射たが一本も射当てることはできず、川に投げ込もうとしたが身体を持ち上げることすらできず、さらに火をつけようとしたがその身体を焼くことはできなかった。そして、ついには台座ごと彼を崖の上から川へと放り込んだのである。

ところが、ミラレパは蓮華座のまま水に触れることなく空中に浮き、しばらくすると徐々に上昇し、ついには狩人の頭上を越えて元の場所に戻った。この間彼は一言も発することがなかった。狩人たちは驚き、あわてふためいて立ち去った。そして、後に彼らはミラレパが偉大な聖者であることを知り、彼に信を抱くようになったという。

❖救済の命を受けてラーマクリシュナのサマディ

十九世紀インドの聖者、ラーマクリシュナ・パラマハンサは、





人生そのものがサマディといわれるほど頻繁にサマディに入っている。ここに紹介するのは、いわば彼の人生を左右する重要なサマディのエピソードである。

彼が二十八歳のとき、カーリー寺院にトタープリという聖者がやってきた。四十年以上に及ぶ厳しい修行により、ニルヴィカルパ・サマディを得た聖者である。

トタープリはラーマクリシュナの優れた潜在性を見抜き、秘儀を授けようと提案。その結果、一日にしてトタープリのステージに到達してしまうことになる。

それから一年後、彼は六カ月間のサマディに入った。その間、身体は仮死状態になったままで、鼻や口の穴には蝿が出入りしてひどいありさまだったが、サットヴァの要素に富んでいたため危機を乗り越えられたのである。それでも、肉体を維持することはなかなか難しく、栄養不足がたたってついに肉体は死に直面。そんなとき一人の僧侶が現われ、荒治療を施し、肉体は死を免れることができた。

このときのサマディでラーマクリシュナはカーリー女神から〝人類救済〟の使命を受けたのだという。

なお、サマディで最も有名な聖者といえば、仏教の開祖サキャ神賢（釈迦牟尼）だが、これは仏典を見てもらえば、高弟たちも含めて多くのサマディの記述を容易に見つけられるので、ここでは省略させてもらった。





SAMADHI

マイトレーヤ正悟師により行なわれた解脱者の証明、
アンダーグラウンド・サマディ――。
1991年11月12日から17日にかけて
山梨県・上九一色村で繰り広げられたこの解脱者の奇跡を、
ここでは再度簡単に振り返ってみたい。



UNDERGROUND

アンダーグラウンド・サマディ成功までの軌跡

第一部
実録！アンダーグラウンド・サマディ1991

❖突然の発表

それはまさに突然の発表だった。一九九一年九月二十三日、東京・千代田区の千代田区公会堂で行なわれたオウム真理教の第二回「大説法祭」でのことである。衛星中継システムを使って全国のオウム真理教が一つになったこの催しが始まった直後、麻原彰晃尊師はこう語った。

「……そしてこのマイトレーヤ正悟師のシャクティーパットの前、十一月十二日から約四日から五日間、これは今日わたしが心の中で決めたことですが、彼にアンダーグラウンド・サマディをやらせたいと考えています。これはインドでよく行なわれている、地下に飲まず食わず、四日、五日間こもると。そして、三昧に入るという技法です。もう既に彼の代謝はかなり落ちていて、一日の消費カロリーも通常の人のだいたい三分の一とか、四分の一のレベルに落ちています。これを皮切りに一気に彼のステージの証明をなし、そして十二月十五日からのシャクティーパット・ツアーを始めたいと考えています。」

かつて麻原尊師自らマハー・ケイマ正大師とともに証明実験に参加されたサマディ。それが三年半のときを経て、愛弟子マイトレーヤ正悟師によって再び証明される日が来たことが高らかに宣言された瞬間である。

マスコミも注目する中で行なわれた解脱の証明、アンダーグラウンド・サマディは、この突然の発表からスタートしたわけである。

❖運命の日、十一月十二日

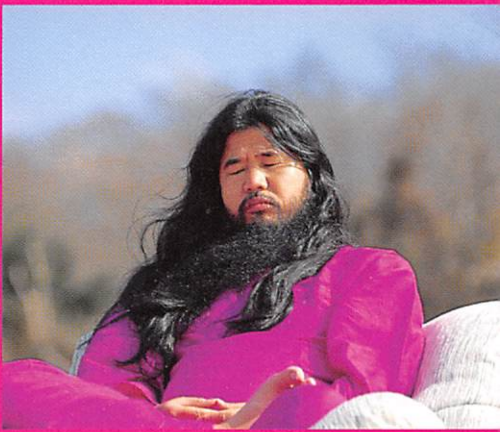
それから約ひと月半を経た十一月十二日。アンダーグラウンド・サマディの会場となった山梨県・上九一色村のオウム真理教敷地内では、一辺三メートル、二十七立方メートルのチェンバーも既に地

中に埋められ、また、酸素濃度等の計測のために用意されたプレハブも隣接され、スタッフ一同万全の体制でアンダーグラウンド・サマディの開始を待っていた。

　ところで、この運命の日は早朝から本当に不思議な天気だった。周囲の山々には雲がかかり、会場の上空のみが雲一つない快晴。麻原尊師が会場に姿を現わした午前十時四十分ころには青空も広がり、背後にそびえ立つ富士山もその雄姿を現わしたが、会場周辺はこれから起こる奇跡を予感させる独特の雰囲気に包まれていた。

　そんな緊張感に包まれた雰囲気の中で始まったアンダーグラウンド・サマディの式典は、まずは麻原尊師によるチェンバーの修法から始まった。

　地下に埋められた三メートル四方のチェンバー内で、およそ三十分ほどかけて供物を修法される麻原尊師。今回のアンダーグラウンド・サマディに強い関心を持って取材に駆けつけたＮＨＫ、日本テレビ、







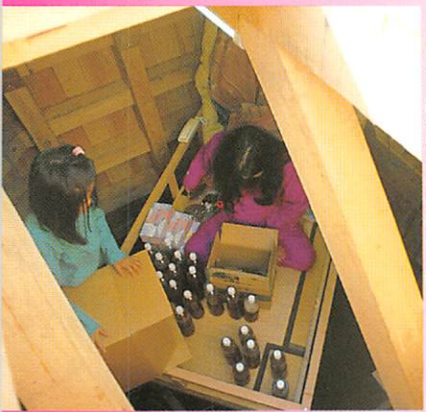
週刊ＳＰＡ！（スパ）などのマスコミ関係者が、尊師の姿をカメラに収めようと慌ただしく動き回る姿が印象的だった。

❖同十一時十二分

　修法終了。すぐさま麻原尊師による説法が行なわれる。ここで紹介できないのが残念だが、それはアンダーグラウンド・サマディの式典にふさわしい、サマディに関する高度な内容を含んだ説法だった。

❖同十一時三十分

　この日の主役ともいうべきマイトレーヤ正悟師が会場に姿を現わした。車から降りた正悟師は、尊師の指示に従って足早に壇上に上がった。サマディの準備の最後の仕上げともいうべき、イニシエーション（秘儀伝授、エンパワーメント＝エネルギー移入）を受けるためである。


チェンバー内で修法中の麻原尊師

やや緊張した面もちを見せる正悟師。尊師から最高のイニシエーションを受けながら、うつむき加減のその口元が「はい」と返事をしているように何度も動くのが見える。おそらくサマディのアドバイスを受けているのだろう。いくら教団が大きくなろうと、たとえ信徒一人一人ともグルと弟子の一対一の関係を決して崩そうとしない、オウム真理教を象徴させるようなグルと弟子の師弟愛を感じさせるシーンである。

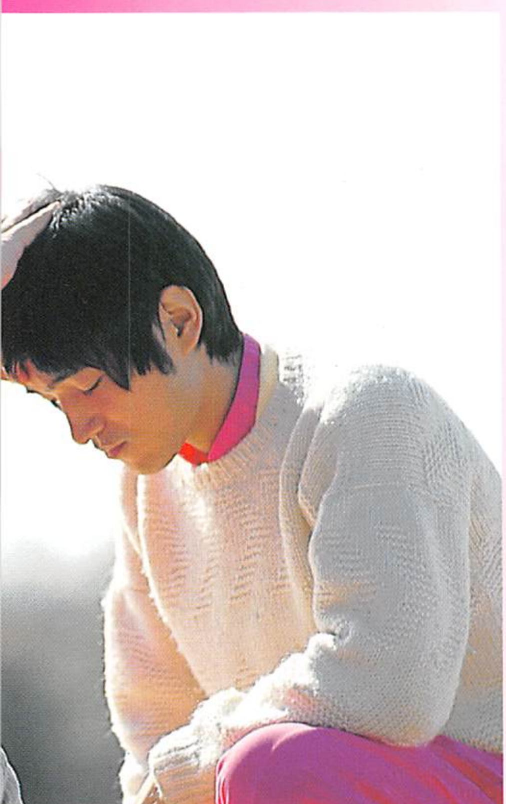
❖同十一時四十分

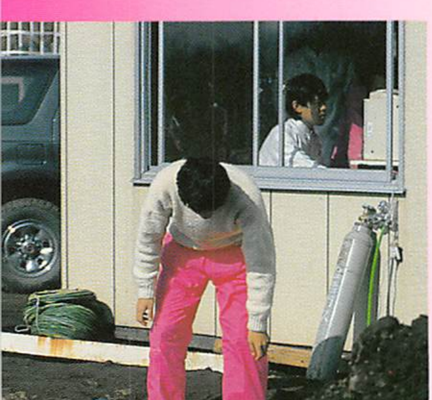
約十分ほどのイニシエーションが終わると、正悟師はすぐさま小走りにチェンバーに向かった。壇上からぽっかりと地面に五十センチ四方の口を開けたチェンバーまでおよそ十数メートル程度だろうか。世紀の一瞬をカメラに収めようとする報道陣を振り切るような早い足取りである。

せっかくいただいたグルのエネルギーを少したりともロスしたくない――突然の行動には、そんな気持ちが現われているような気がした。

❖同十一時四十一分

チェンバーのハッチが閉じられ、すぐさま土が盛られた。その上で、麻原尊師によって香の供養がなされる。マスコミも注目する中で、ここに解脱者のパワーの証明、アンダーグラウンド・サマディが開始されたのである。





段取りよろしく進められた今回のアンダーグラウンド・サマディ。しかし、表面上の順調さとは裏腹に、初日はチェンバーの中でなかなかサマディに入れずに苦労させられたという。サマディ開始のこの日、会場には百名を越す人々が集っていて、これらの人々の想念がサマディに入る邪魔をしていたからである。

もちろん、会場に集った者のほとんどが日々の修行によって煩悩を落とそうとする修行者だったため通常よりは影響は少ないが、さすがに仏典で「静慮」といわれるだけあって、人々が集まったときに発せられる喧騒は、サマディには大敵だったというわけである。

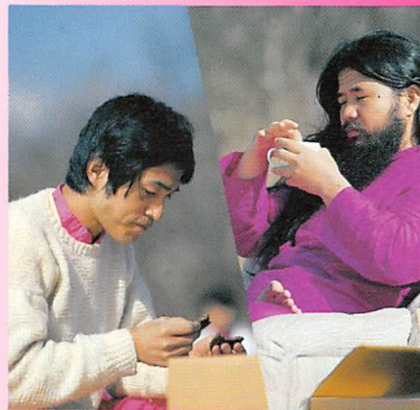
しかし、夜半過ぎには麻原尊師の指示で近隣の施設に移動することになり、二十三ページのデータを見ても明らかなように、以降、順調にサマディに入ることになる。

❖十一月十三日

酸素濃度、二酸化炭素濃度もようやく安定。早朝、マイトレーヤ正悟師からインターフォンで電気ストーブの使用の件で問い合わせがあった以外は、特に大きな問題もなく過ぎていった。

❖十一月十四日

ようやく室温もほぼ二十度で落ち着き、酸素濃度、二酸化炭素濃度の計測データも誤差も少なく安定した数値に。このころになるとデータからもサマディに入ったり出たりの状態が、はっきりとうかが





麻原尊師から最後のイニシエーションが施された



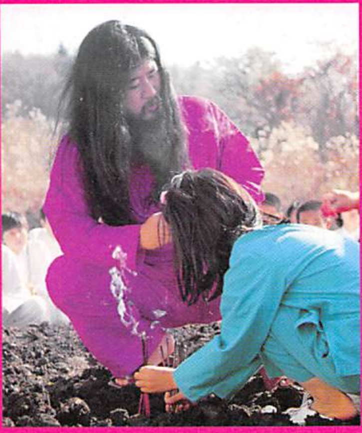
える。

ところで、この日、静岡県・富士宮方面からアンダーグラウンド・サマディの会場に向かう途中、夜空に光る雷を目撃。雷はオウム真理教の主宰神であるシヴァ大神の象徴である。季節外れの雷に、このサマディが神々の祝福のもとに行なわれているのだと確信させられた。

❖十一月十六日

実験開始以来初めてチェンバー内から計測データの状況を聞かれ、その際にスタッフが口頭でマイトレーヤ正悟師の状態をチェック。やや疲労気味ということで、報告を受けた麻原尊師が駆けつけ、インターフォンを使って直接チェンバー内の正悟師と話す。残り約十八時間の時点のことである。

なお、このころになると、十二時間おきぐらいにチェンバー内からデータについての問い合わせが入るようになった。







❖十一月十七日

午前十一時四十分にチェンバーのハッチをオープン。現代科学の常識では考えられない五日間、百二十時間のアンダーグラウンド・サマディは、ここに大成功のまま幕を閉じた。

ところで、オウム真理教では今回の成功を皮切りに、同年十二月五日から七人の解脱者が五日間交替でチェンバー内に入り、アンダーグラウンド・サマディに挑戦している。

これによりオウム真理教が〝解脱者〟と呼ぶ者が、仏典あるいはヨーガ教典等に記述されている解脱者の要件を満たした、〝本当の意味での解脱者〟ということが証明されるだろう。

なお、その報告はまた別の機会に譲ることとする。

今回のアンダーグラウンド・サマディで見事に解脱者の証明を果たしたマイトレーヤ正悟師。ここでは激闘の五日間について語っていただいた。

❖チェンバーはバルドーの模擬体験

――まずはチェンバーに入ったときの感想からお聞きしたいと思います。

（正悟師）事前のセッティングをすべて任せていたんですね。それで中に入ると電気ストーブが横から照っていたり、例えばティッシュだとか予想外に不必要な物が入っていて驚いたんですよ。それで不要な物を外に出そうかなと思っている矢先にハッチを閉められてしまいました。予定時間よりやや早かったのですぐにもう一度開くんだろうと思いましたけど、そのまま土をかける音が聞こえてきて、ですからあっという間に始まったというのが正直な感想です。

――チェンバーに入る直前、イニシエーションを受けながら麻原尊師からアドバイスを受けていたようですが？

（正悟師）状態についての指摘がありました。スシュムナー管、イダー管の二管については完全に通っているが、右の管、ピンガラ管が若干詰まっていると。だから、邪悪心を取り除く瞑想をしなさいというふうに言われました。

あとは長くサマディに入るためのアドバイスを一ついただきました。サマディというのは入る入らないだけではなくて、どのくらい入ってられるかでステージが違うんですよ。長時間入ってられるほど高いステージのサマディということで、実際にこうした実験のときでもその方が楽なんですね。そういうことも含めてアドバイスを受けました。

――イニシエーションが終わった後、報道陣を避けるように、走るようにチェンバーまで行かれたのは、やはり彼らとの接触によるエネルギー・ロスを避けるためでしょうか？

第二部
激闘五日間！マイトレーヤ正悟師インタビュー

（正悟師）自分としてはそんなつもりはありませんでした。最後に麻原尊師から「よし、いってこい！」と気合いを入れられたので、結果的にああいう雰囲気になったのだと思います。

――地中に埋められたチェンバーの中はどんな感じでしたか？

（正悟師）これは記者会見でも話しましたけど、チェンバーの中というのは、人間が死んだ後の次の転生までの中間状態、バルドーと似てるんですね。つまり、何もできないわけです。例えば、愛する者に会えない、食べ物もない、権力や地位もない、こういう人間が愛着しているものが一切ないわけです。

しかも、それどころではなく、あの中では真っ暗で何も見えず何も聞こえませんので肉体と感覚を失ったバルドーの状態とすごく似てるんですよ。実際のバルドーはそういう状態からヴィジョンが出てきて、それに飛び込んだ瞬間、転生先が決まるわけですが、転生を失敗しないためにも死ぬ前にだれでも一度はそのような極限状態を体験し、バルドーの模擬体験をされたらいいと思います。

❖サマディの条件

――ところで、一日目はなかなかサマディに入れなかったようですが、やはり周りの人の想念というのは気になりましたか？

（正悟師）自分では最初、原因がわかりませんでした。あれだけエネルギーを貯めた状態だと普段ならフッとサマディに入れるんですが、緊張が取れずにイライラしているんですよ。何かエネルギーがぶつかり合っているような、そんな状態でした。やはり上にいた人たちの波動を受けていたんでしょうね。

サマディというのは「静慮」といわれるように、心が思索に深く集中し、その結果煩悩が崩壊して、静かな状態になって内側の喜びというか喜楽が生じて特殊な状態に入るんですよ。結局、酸素消費データからも明らかですが、その方たちが移動するまでなかなかサマディに入れなかったようです。

――そういうことに対する焦りはありませんでしたか？

（正悟師）焦りというわけではありませんが、いつもどおりではないのでちょっとまずいなという気持ちはありました。ただ、サマディの前のディアーナ（瞑想状態）には入り、意識がアストラル世界に飛んでいたこともありましたので、ずっとまずいなと考え続けていたわけではありません。

そのうち、麻原尊師のご配慮により上にいた方にも移動していただいて、二日目以降は確実にあちらの世界に意識がいくようになりました。

❖苦しみは心がつくり出す幻影

――チェンバーの中では、特に身体の変化はありませんでしたか？

（正悟師）三日を過ぎたあたりで、ちょっと息苦しさを感じました。そこで初めてインターフォンで酸素濃度を確認したわけです。それ以前にストーブの件で、ベッドの下に入れても測定に影響はないかを確認してましたけど、測定値を確認したのはこのときが初めてでした。

――それまでデータについては全く気にならなかったのですか？

（正悟師）正直いって、それまで測定値について聞こうか聞くまいか迷ったことがありました。いらぬ情報に振り回されたくないというのがありましたからね。ただ、このときは自分自身で息苦しさを感じていましたから、数字を聞いて心が影響されて身体に変化が生じるのはまずいが、既に変化を感じているなら聞いた方がいいだろうと思って連絡をとりました。

そのときのデータは確か、一九・六パーセントという数字でした。しかも、前日から〇・二パーセントしか落ちてないということで、安心したらしばらくして息苦しさも消えてしまいました。

今から思うと、三日目ぐらいになって、







5日間、120時間を経てチェンバーのハッチが開かれた





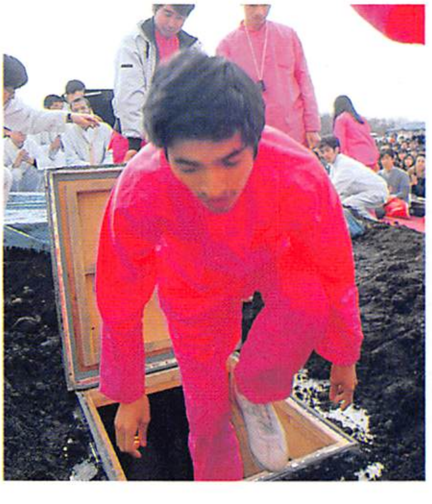
そろそろ終わるなと思って気が緩んだんでしょうね。それで肉体に意識が集中し、肉体への執着というのが増大したんだと思うんですよ。もちろん、その肉体は疲労しているから呼吸がちょっとしづらくて、それが息苦しさにつながったのだと思います。いずれにせよ、今回のサマディで麻原尊師の教えどおり、すべて心の作用だというのがよくわかりました。

――それからしばらくして麻原尊師が来られたわけですね。

（正悟師）そのとおりです。肉体的につらいなって意識し出したんですね。座法を組んで背はもたれて瞑想しているうちは問題ないんですが、例えば、ちょっと動こうとすると貧血を感じたりするわけです。その状態をスタッフにそのまま伝えたら、ちょっとオーバーに伝わったようで、麻原尊師がいらしてくださいました。

――そのときどのような話をされたんですか？







サマディ直後のチェンバー内



（正悟師）ちょうどサマディに入っていたときだったんですよ。それで、「大丈夫か？　話せるか？」というふうにいわれて、アドバイスをいただきました。やっぱり実際よりもちょっとオーバーに伝わったんでしょうね。自分では最後まで楽々といける状態でしたから。

ただ、やっぱり最後は気が抜けたというか、集中力が欠けてしまって。もちろん、酸素消費のデータそのものは後半になればなるほど数字がいいんですが、そのあたりが今回の反省材料です。

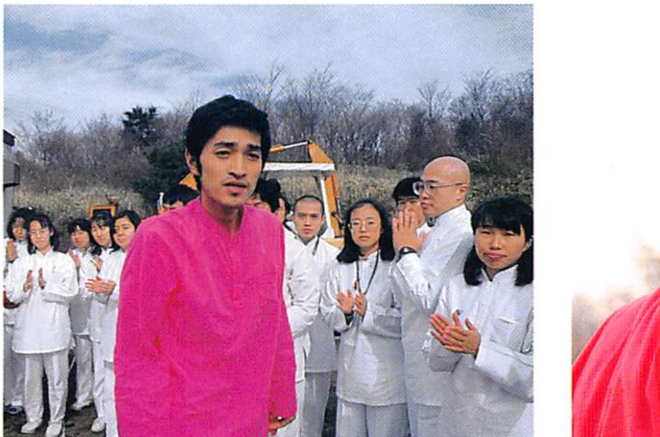
❖食の消化も苦痛

――チェンバーが開いた瞬間の気持ちはどうでしたでしょうか？

（正悟師）最後は普通の瞑想状態だったので、土を除いているのはわかっていました。ただ、始まりが早かった分、予定よりも早くハッチが開いたので、何の感動もなく終わってしまいました。



今回の功績にタンカが授与された

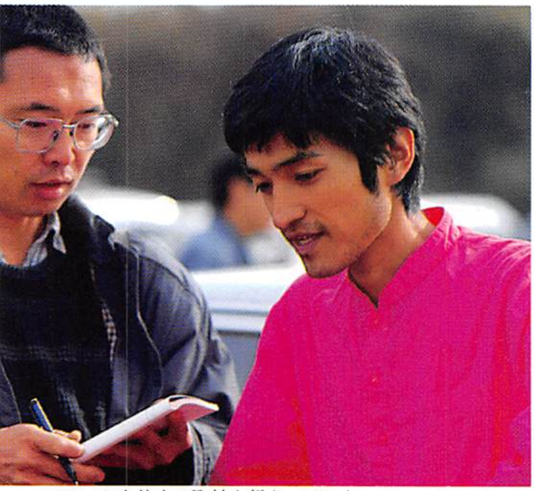


実は、この日の五時ぐらいからどうにもイライラして、また深いサマディに入れなくなってしまったんですよ。後でわかったことですが、会場に信徒さんが来ていてその方たちの想念を受けたみたいで、最後は浅いサマディか、瞑想状態でした。

――五日間の断水断食を終えられて、初めてハチミツ湯を口にされたときの感想は？

（正悟師）五日断水断食の直前も三日間断食していて、その前の三週間もわずかな量しか取ってなかったんですよ。それで胃がなくなってしまったような、食欲がない状態でしたから、消化するのがきつかったですね。

正直言って、これは胃があるから苦痛があるんだと思いました。天界というか、神々は要するに胃がなくて、プラーナを肌から吸収してそれで十分ですよね。やはりあちらの世界の方がいいんではないかというように実感させられました。





マスコミも熱心に取材を行なっていた

❖三つの証明

――最後に、今回のアンダーグラウンド・サマディを終えられた感想をお願いします。

（正悟師）今回のアンダーグラウンド・サマディの目的は三つあったと思います。一つ目は解脱の証明。解脱というのはすべてサマディから生じる。それはサキャ神賢の教えでも正サマディから正精通があって、正離解脱がある。そして、ヨーガ・スートラというヨーガの根本教典にもサマディをもってエンライトメントとするという記述があるように、サマディができるかどうかというのは、オウム真理教の成就者というのが本当に解脱しているのかしていないのかの証明に他ならない。その証明が今回できたと考えています。

そして二つ目、これは欲六界が存在するんだという証明。これはもちろん、欲六界を本当に認知するためには皆さんの

修行を待たなくてはなりません。しかし、その前に麻原尊師が繰り返し説法でいわれているとおり、実際に見る前に人間界にその欲六界の投影、これを見ることができる。

地獄界の投影として、餓鬼界の投影として、病で痛みが止まらない人、病で食べたいものが食べられない人、そういう人が存在している。それはその人間、今人間である魂がその次の世界で地獄や餓鬼の世界に転生するということを示している。

では今度は高い世界があるのか。高い世界の特徴を見てみると、天界の住人はプラーナを食べる、食物という物質を取らない。天界の住人は呼吸を一日一回する。そういうのが人間界に投影されているのか。もし高い世界から生まれ変わってきた魂がいて、または高い世界に生まれ変わる魂があるとしたならば、そういう人たちは天界の住人と同じように食を断ち、そして呼吸を断つことができるはずである。今回サマディでそれがなされ、よって欲六界はあるんだと一種の証明がなされたと思います。







そして三つ目、仏教、真理の根本的な教義、これはすべては心の現われであるということです。

心の現われによってこの欲六界は形成される。仏教の教義というのはすべて心、これがすべてを決定してるんだとされています。それは本当なのか。心がどうなろうと人間が生きるためには呼吸が必要である。心がどうなろうと人間が生きるためには食が必要だと現代の人たちはいうでしょう。しかし、サマディによって心が統御されれば呼吸はいらない、食はいらない、よってすべては心の現われであるという証明の一つができたんではないかと思ってます。

今回のアンダーグラウンド・サマディによって、この三つが証明されたと思っています。

――どうもありがとうございました。

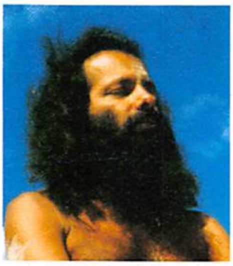
エンバーのすべて

・サマディで使われた
ートルの空間。
な構造になっていたのか？
のために特別に用意された
みることにする（イラスト参照）。



パイロット・ババと同じ条件

インドのヨーギ、パイロット・ババが数年前に山梨県でアンダーグラウンド・サマディに挑戦したのは既に述べたとおり。今回はそのときと全く同じ条件にするために、当時、チェンバーの施工にあたった勝山村の業者を訪ね、同じ条件のもとに製作が行なわれた。





チェンバーの構造

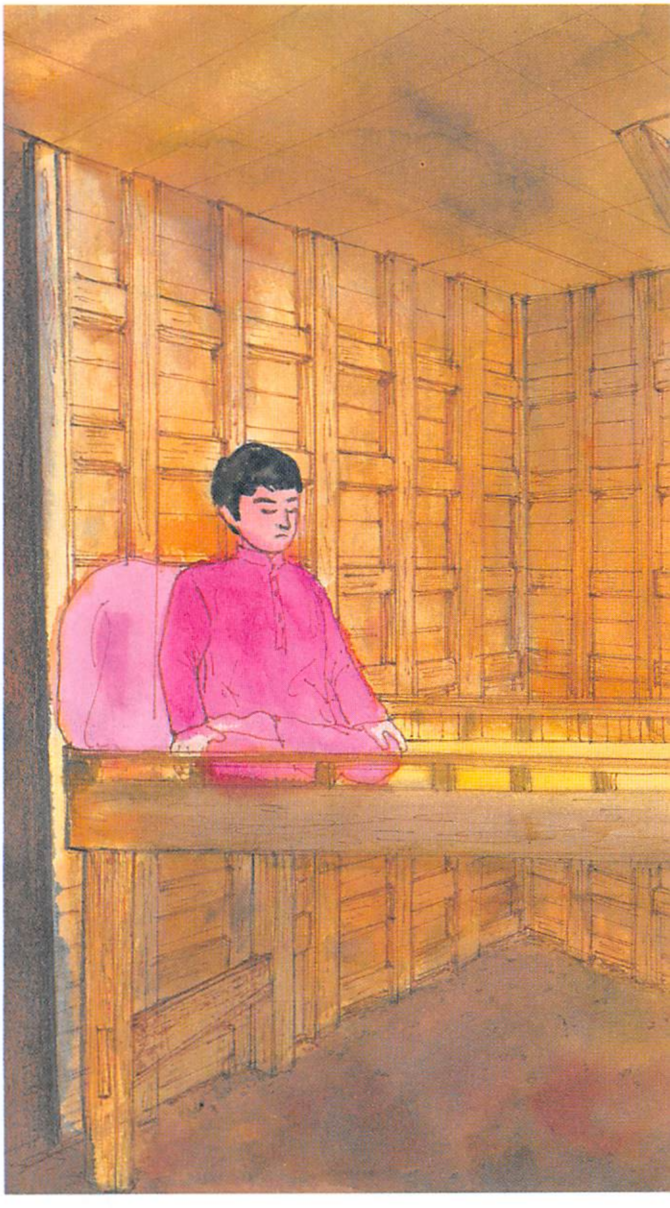
チェンバーの大枠には米松を使用。鉄にするか木材にするかで最後まで検討が加えられたが、金属の場合、錆びて酸素を消費する心配があり、また、錆止めのためにペンキ等を使ったとしても有害物質の発生の心配もあるためにおいもせず加工もしやすい米松が選ばれた。

設計にあたってはきちんとした構造計算がなされ、上から盛られる土圧にも十分に耐えられるように丁寧な補強を加えられながら設計。仮に許容範囲を越える土圧が上から加わったとしても、左右前方の壁は崩れない構造になっている。なお、チェンバー上部には防水のためにステンレス板が張り巡らされた。

ちなみに、内部は使用された木材の体積を引いて、二十七立方メートルに設計されている。

必見！これがチ

アンダーグラウンド
二十七立方メ
その中は果たしてどのよう
ここでは今回の立証実験
チェンバーを徹底的に分析して



カビ対策

材質を木材にしたことでカビ対策には一苦労。予定より完成が早くなったため、夜はシートをかぶせ、天気のいい昼間はシートをはがして乾燥させたり、表面を布で拭いたりした。もちろん、カビの発生により酸素濃度の計測データに影響を来さないようにとの配慮からである。

その他の工夫

瞑想用のベッドを対角線上に置くことで空間が広く感じるように工夫。また、二パーセント増えただけで酸素消費量を二倍にさせてしまう二酸化炭素対策のために、ベッドを一・三メートルの高さに用意した。

これは二酸化炭素の比重を考慮してのことだが、実際はマイトレーヤ正悟師の代謝は予想以上に低く二パーセントの増加さえなかったことも加えて紹介しておこう。

からも熱い視線



今回のアンダーグラウンド・サマディにはマスコミ関係者も強い関心を抱いていたようで、ＮＨＫ、日本テレビのテレビ局、さらには週刊ＳＰＡ！など週刊誌も熱心に取材を行なっていた。解脱者の証明はジャーナリストの前でもなされたわけである。各社とも冷静に取材を続けながらも、初めて見る奇跡に驚きを隠せなかった様子である。



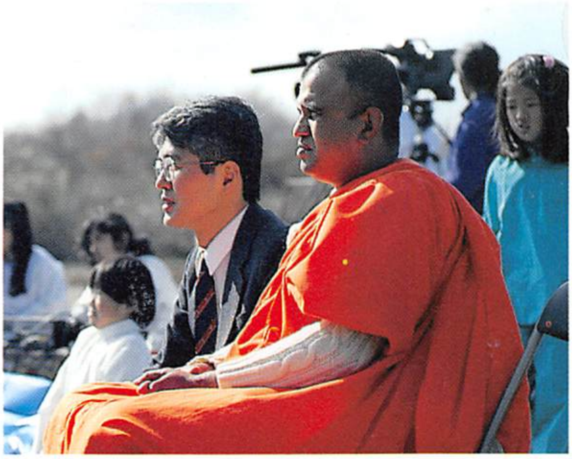
また、海外からは、テーラヴァーダ（上座部仏教）の国からの来訪者、南スリランカ福祉協会のグナロカ会長も熱い視線を送っていた。

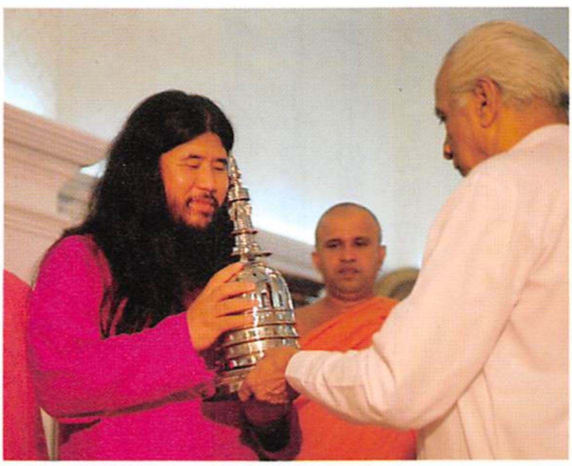
インド洋に浮かぶ美しい小島、スリランカ。上座部仏教の国として世界的にも有名なこのスリランカを麻原尊師が数十名の弟子を連れだって訪れたのは、一九九一年九月末のことだった。このとき麻原尊師一行が行く先々で熱烈な歓迎を受け、また、同国のＤ・Ｂ・ビジェトゥンガ総理大臣から仏舎利（サキャ神賢の遺骨）が贈呈されたのは、有名な話である

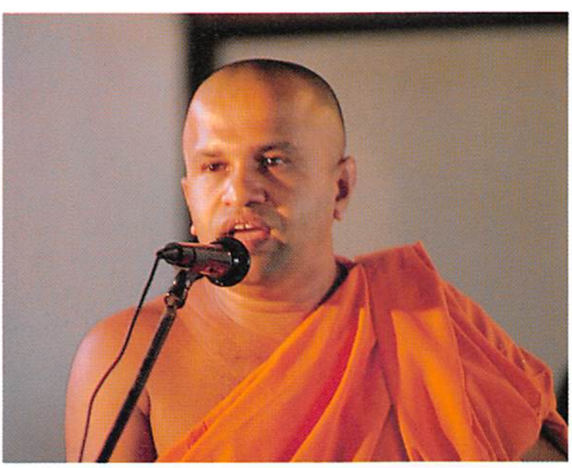


このスリランカでも人々の尊敬を集めている高い地位にある出家修行者、グナロカ会長は、今回の成功に際し、こんなコメントをくださったのでここに

マスコミ、海外







紹介しておこう。

「わたし自身は初めて見ましたが、サマディそのものはインドの仏教にも伝えられているものです。もちろん釈迦牟尼も修行の中で同様のことをやられましたし、そのことは本にも書いてあります。

やはりきちんとした修行をされている方だからできる、素晴らしいことだと思います。普通の人では絶対にできるものではありません。

これから彼がより修行に励んだら、仏典に書かれているようなもっとすごい奇跡も起こせるのではないでしょうか。例えば、身体から光を発したりするような。より高いステージに至ったら、そういうことも可能だと思います。

とにかく、今回のアンダーグラウンド・サマディは、一般人にはできない本当にすごいことだと思います。」

いずれにせよ、今回のサマディの成功が各方面に与えた影響は、少なからぬものがあるようである。



サマディへの道のり
マイトレーヤ正悟師インタビュー

アンダーグラウンド・サマディ決定から運命の日まで、マイトレーヤ正悟師はどのような準備をされていたのか。インタビューの第二部として、サマディ直前の修行にスポットを当ててみた。

◈サマディの修行は経行・教学・瞑想

――いつごろから修行に入られのでしょうか?

（正悟師）　確か十月十三日だったと思います。麻原尊師の方から、経行と教学と、それから瞑想をやりなさいといわれました。

――それぞれの修行についてポイントを



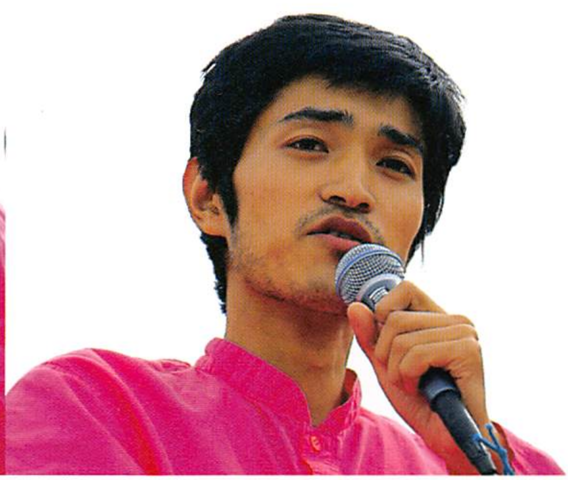
教えていただけますか？

（正悟師）　まず経行は一日二回各十キロだから、二十キロですね。単に歩くだけでなくて、サヒタクンバカというプラーナーヤーマを加えていました。アップ・アンド・ダウンがあるから結構修行になりました。平均で普通に歩くよりも相当歩くのが速かったと思います。十キロを一時間半ぐらい、短いときは一時間二十四分ぐらいでいっていましたから。

　そのときにプラーナーヤーマと一緒に決意如意足、これはオウム真理教の信徒さんが特別教学システムで使っているやつ、それを聞きました。その内容というのは帰依ですね。真理勝者方、シヴァ大神、グルに対する帰依を培おうと思って聞いていました。

　あとは例えば、肉体に対して痛みが出てきたとき、足が重いとかつらいとかいうときは、肉体は我がものではなく、わたしの本体は真我なんだという瞑想をしていました。すると、身体が軽くなって





次第に次第にスピードが増してくるんですよ。特に、最初の方は天候が悪い日が続いたんですね。かなり強い雨と風が正面から吹きつけてきて、そういうときこんな瞑想をしながら歩いていました。

――教学については何か特別なことをやられたんですか？

（正悟師）　いえ、教学もやはりオウム真理教の信徒の皆さんがやってる特別教学システムをやって、その中の教義によって煩悩を破壊する、煩悩を止滅することを意識してやりました。例えば、瞑想に使えると思った部分では深くそこで止まって考えてみるなどということもありました。

――最後の瞑想については？

（正悟師）　やっぱりメインはこれでした。無色の瞑想といって、いろいろなものについてひたすら思索していくんですよ。

　これはなぜ無色の瞑想というかというと、無色界すなわち非形状界、これは想

念の世界ですよね。だからこの世界は思索によって、想念を変えることによって、データを変えることによって変えられる。色界も心の要素と形状-容姿によってなっているわけだから、心の要素を変えてしまえば変えられる。だから無色の瞑想というのは最も早い瞑想なんですね。

これに対してグルヨーガ、ツァンダリーなどの観想を中心とした瞑想というのは、基本的に色界に影響を与える。つまりイメージだから。だからできるなら無色の瞑想が一番早いんですよ。

ただ、色界を中心とした瞑想はこのように観想すればいいというイメージが与えられる反面、無色の瞑想は思索に集中し続けて、一つの課題を柔軟に追い続けなければいけないので、そういう意味では広く深い勉学が条件になります。



◈機関車のような意識を

——麻原尊師の方から具体的なアドバイスがあったんでしょうか?

(正悟師) 翌日ですから十月十四日に簡単にありました。

このとき大まかに与えられた瞑想課題というのが、五蘊にそっての思索と六つのチャクラにそっての思索です。五蘊だったら形状-容姿、感覚、イメージ、経験の構成、識別と一つ一つやって、一方のチャクラは嫌悪、性欲、食欲、プライド、名誉欲、それから権力欲、それからすべての願望、現世的な願望、そういうものにそって思索をしていくわけです。

これはマハー・ムドラーを成就させていただいたときもそうですが、その一つ一つの煩悩についてどう思索するのかの細かい点については、自分で考えろというものでした。そのあたりはいつもと変わらずですね。

特に今回は、自力でやっていく、機関車のような意識をつくる必要があると言われていたんですよ。もちろん、グルとシヴァ大神のエネルギーが注がれているるんだけれども、そういうことが重要だから、あれやこれやとはあまり面倒見ないというふうに言われました。

　とにかく、そのときは五蘊を正しく見ると。例えば、肉体。表面は美しくても中は汚いとか、表面の美しさも時間の推移とともに変わっていくとか、そういうことですね。それとあとはそれに基づいて煩悩を鎮めていく寂止ということを言われてました。



◈観念は障礙である？

――修行そのものは順調でしたか？

（正悟師）これは初めのころですが、精神的に大きな出来事があったんですよ。酸素消費とか二酸化炭素の発生とか、そういうものに対する観念を構築してしまったんですよね。何パーセントくらい消費が許されるのだろうとか、そういうものですね。

　スタッフの一人から二酸化炭素が問題で、仮に酸素は七パーセント消費できても、気体の場合はそのまま七パーセントの二酸化炭素になる。しかも、二酸化炭素は二パーセント増で不快に感じ、単に不快だけではなくその不快さのために酸素消費が二倍になると聞きました。それでいらぬプレッシャーがかかったというか……。

　実際には、酸素消費でさえ二パーセントにならず、全く無用の心配だったのです。知識は障礙である、または観念は苦であると、教義どおり苦しんでしまいました（笑）。

　これについて麻原尊師は、解脱者のガ

スに対する強さは常人の比ではないから、有毒ガスさえなければ問題ないんだと気にも留めておられませんでした。

◈帰依しかない

——その後は精神的にはどうでしたか？

（正悟師）想像していた以上に厳しいなという思いがありましたから、やはりそのとき帰依というのが意識に上りましたね。そういう不安のある中やらなければいけないわけだから、信と帰依が試されるという感じでした。

これは一種のマハー・ムドラーですね。もちろん、当日は危険ラインを超えてまでやることはないにしても、限界いっぱいまでやらなければとは思ってましたから。これもいらぬ知識の話ですが、二酸化炭素の話で五パーセントを越えたら三十分以上いると不可逆的な障害が起きるですよ。つまり、後遺症ですね。そんな考えも頭の中をちらっとよぎって、ですから本当にグル、シヴァ大神の神秘力を確信していないと、強く意識してないとできないことだなとは思いました。

◈成功の確信

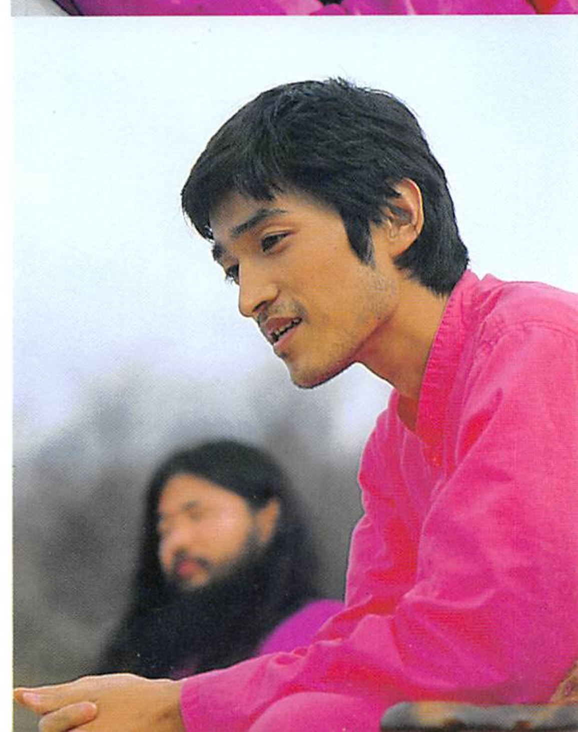
——その後、修行メニューに変化はありませんでしたか？

（正悟師）基本的には最後までありませんでした。

ただ、修行を始めて十日ほど経ってから、麻原尊師の方からサマディの目安を教えてくださいましたけど。それは、眠りがなくなるということはサマディに入







れると考えていい。それから、食欲がなくなったら、食欲が落ちたら酸素消費が急激に落ちるというものでした。
　これはわたしにとっては大変ありがたいことでした。そのとき欲していたのはサマディにが成功するという一つの目安でしたから。自分としては、眠らない、食をとらないということにそれほど観念的なものはなかったから、気持ちとしては楽になりましたね。
――その後、実際にどのようにして眠りや食欲を落としていったんでしょうか？
（正悟師）食に関しては抑えるんではなく食欲を自然になくす方法を取りました。無理やり抑えると渇愛が生じますよね。そういうのを仏教では否定していて、そのとき行なったのは、渇愛、食欲が生じたら、食べるけど食べながらそれを厭逆するという方法でした。これはおいしくないと思って食べる。で、食欲が落ちるのを自然に待つということです。この方法は成功して、次第に食は少なくなっていきました。
　一方、眠りは麻原尊師のつくられた眠りを滅する瞑想テープというのがあるんですが、それをやり続けてだいたいボーっと一時間ぐらいするかしないかぐらいにはすぐになりました。



◈ザンゲの重要性

――その他にアドバイスはありませんでしたか？
（正悟師）成功の目安としてはありました。尿が少なくなったら修行が成功しているとか、小さいころの記憶が出てきてその後意識が飛ぶとか。ちょうどその段階の酸素消費は普段の五の十乗分の一で、意識が飛んだらゼロになるともいわれました。これは麻原尊師がアストラルで調べてきたことだということですが。
　今回は麻原尊師の方から連絡をくださるというよりも、わたしの方がザンゲするために電話をして、そのときにアドバイスをいただくという感じでしたので、そんなに多くはありませんでした。今回はあくまで一人でということでしたし。
――ザンゲというのはどういう内容ですか。
（正悟師）これは宿命通が身につくプ

ロセスですが、先ほども言ったように修行が進むに従って、忘れかけていた小さいころの記憶が思い出されてくるんですよ。それでまだザンゲしてなかったことを麻原尊師に聞いていただくという形でした。

　これぱかりは心で思うだけでは片手落ちで、グルに対して言葉にして行なわなければ意味がないと思ってましたから。おかげでナーディーの詰まりが取れましたし、サマディの成功はこのザンゲによるところが大きかったと思います。

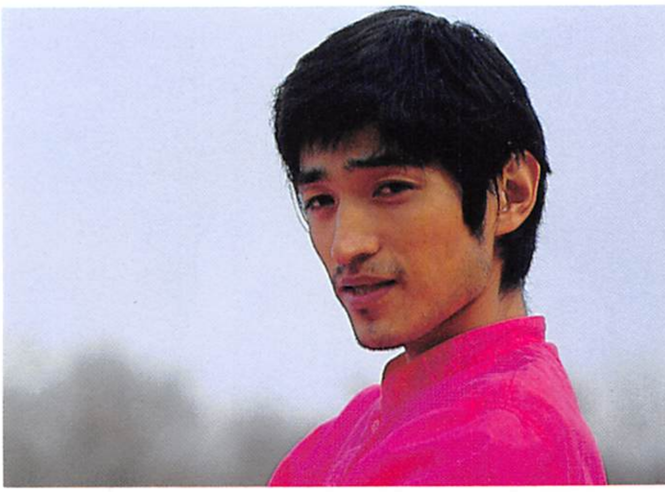
◈修行中に体験したサマディ

――ところで、この一カ月の修行で、実際にサマディの体験をされたのはいつごろでしょうか?

（正悟師）確か十一月に入ってすぐに、四つの静慮についてのアドバイスをいただいたんです。このときは麻原尊師の方から初めて連絡をいただいたんですが、瞑想の段階について把握しておかなければいけないということで四つの静慮、四つのサマディについて説明していただきました。

　この話があってから二、三日して第二静慮らしきものを経験して、それからまた数日後に、経行から帰ってから思索を始めると気持ちのいい状態に包まれて第四静慮を経験しました

　戻ったときに頭がすかっとしてたんです。まさにこれがサマディの証明なんですが、しかも、ビリビリと火元素のエネルギーが強まっていて、その日はその状態にもう一回入りました。第四静慮に頻繁に入っていたわけではありませんが、このころには準備は万全でした。あとはどのくらい長い時間、どのくらい高いサマディに入れるか、それが問題でした。



◈オウム真理教の修行でサマディ体験を

――最後に、この一カ月の修行期間を振り返って一言お願いします。

（正悟師）正しい見解を培って正サマディに至る八つの聖なる道、あるいは六つの極厳にしても、オウム真理教の修行というのはだれでもその道を歩けば必ずこのサマディに入れるものなんです。

　皆さんぜひ修行に励み、わたしと同じような経験をなさっていただきたいと思います。

――ありがとうございました。



サマディがもたらした
神秘体験
他心通・宿命通etc……。

仏典によれば、
「八正道」の最終段階
〝正サマディ〟を体験した魂は、
次なるステップ〝正精通〟で
様々な神通力を身につけるとある。

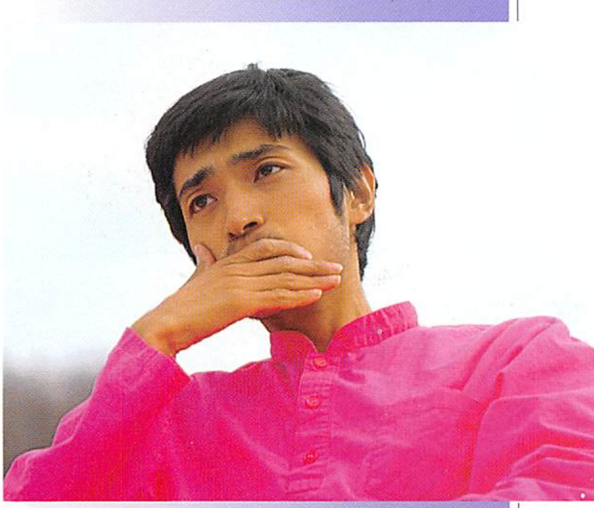
この記述の確かさを証明するように、
マイトレーヤ正悟師は今回のサマディでも、
他心通・宿命通など様々な神通体験、神秘体験をされた……。

❖神秘体験

この日のために約一カ月前から経行・教学・瞑想修行に励んでいた正悟師。最高のエネルギー状態で今回のアンダーグラウンド・サマディに臨めたようで、集中修行の直後らしい数々の神秘的体験を経験した。その一つが、人間の尾てい骨に眠る神秘エネルギー、クンダリニーの霊視体験である。

もちろん、正悟師のステージの高さからいえばこんなものはいつでも可能なのだが、約一カ月にわたる修行でエネルギーが完全に上がりきった最高の状態で迎えられたために、ひときわ強烈な印象を与えたそうだ。

「真っ暗なチェンバーの中で瞑想をしてるんですが、クンダリニーが完全に上がりきっていて、内なる光によって観想がかき消されてしまうほど明るかった。目を閉じると昼間のように明るくて、観想ができないんですよ。それで目を開けると真っ暗というようなそんな状態でした。



色は白銀で、おそらく光のクンダリニーだと思いますけど。

面白かったのは、あまりにも明るいから〝まぶしいな〟と思って目を抑えたりしてみたんですよ。すると目を開いても残像がまぶたの裏に焼きついているんですよね。ちょうど太陽を見た後に目を閉じても光が残っているような、それが逆に目を開けたときに光が残るという感じでした。さすがにこれは初めての、不思議な体験でした。」

❖他心通

次は、正サマディの次なるステップ、正精通で得た神通の体験。

「最終日の早朝五時ぐらいに、どうもイライラしてサマディに入れなくなってしまったんですよ。それで、これは自分の想念ではない、おかしいと思って、〝もしや信徒さんが周りに来ているのでは〟と推測してインターフォンで測定者と連絡をとったんです。



そのときは〝そんなことはないと思います〟という返事だったんですが、それから一時間半後に連絡がきて、〝よくよく調べてみたら会場の方に信徒さんが来てました。時間はおしゃったように五時ぐらいです〟と。

チェンバーが開いてすぐにそんなことがあったと麻原尊師にお話ししたら、これが他心証解智だと言われました。周りの人の想念がこんな形で伝わってくるんですよね。」

ちなみに、正悟師は今回のアンダーグラウンド・サマディ後にもシャクティーパットという大事な修行を控えていたため、エネルギー状態の維持に努められていた。そのためステージの低い者と話したりするだけでエネルギー交換が起こり、てき面にカルマを受けるため、瞑想を始めると相手の心の引っかかりがすべてわかるという状態が続いている。

❖宿命通

サマディ中に見た様々な前生。意識し

て記憶しようとしたわけでもなく、また、ヴィジョンを見た直後にメモをとっていたわけでもないので「記憶もおぼろげ」ということだが、ここではサマディ中に見た前生ヴィジョンのさわりだけでも簡単に紹介しておこう。

◈その一　意識堕落天（阿修羅）の前生

夕暮れどきらしく、薄暗い中、一面の海（凍っていたかもしれない）の上を、白い三角形の乗り物に乗って多くの仲間たちとすべるように滑走。目の前を進む戦艦らしき乗り物のさらに前方には、第一天界、第二天界の住人たちが住む完全無欠山（宇宙の創造のときにでき、宇宙の破壊のとき完全に灰になるまで壊れることのない山）を取り囲む、山頂のとがった外輪山が連なっていた。

氷上（？）を滑走していることから最初は「北国か？」という観念が入ったが、ホバークラフトのように宙に浮き上がる乗り物の特徴、あるいは周囲の山々の特徴が意識堕落天の世界を取り囲む完全無欠山の外輪山の特徴と一致するため、意識堕落天の前世と確認した。



◈その二　江戸時代

目の前に広がるいかにも時代劇に出てきそうな城下町。侍である彼は一人の女性と商店街らしき場所を散歩をしていた。店先にはいかにも江戸時代だとと思われる食べ物、小物などが並べられて売られている。やがて歩き疲れた彼は同伴の女性と茶店に入って……。

◈その三　中世インド

場所は風景などからしてインドと判断できた。そこでの彼は、当時の政府の役人らしき友人と二人で旅をしていた。いつ終わるとも知れない長旅は、古くさい馬車で続けられていたことから、時代は中世ぐらいに思えたという。

このヴィジョンに関してはかなり長い時間、見続けていたが、旅の目的がなかなかはっきりしなかったという。ただ、漠然とだが〝戦争〟という印象が頭には残っていたそうで……。



◈その四　過去？　未来？

突然目の前に広がる宇宙から見た地球のヴィジョン。次の瞬間、「水爆が運ばれて落とされる」とだれからともなく説明がなされた。

その後、一転して目の前には、地は割れ、高層ビルは倒壊し、破壊されつくした都市のヴィジョンが。それはあくまでも部分的な崩壊で、地球全体、あるいは人類すべてが滅亡してしまうというものではなかったが、さながらハルマゲドンを彷彿とさせる。

果たしてこれは、未来の地球の姿なのか、それとも一カルパ前の前世だったのか。

◉

仏典には正サマディで第四静慮に入った後には、神秘的な力、六神通が身につくとされている。正悟師が今回のアンダーグラウンド・サマディで他心通、宿命通という二つを中心に体験されたのは、まさしく仏典の記述が正しかったことの証明でもあるのだろう。

あとがき

宗教は科学である――、これはオウム真理教の基本的スタンスの一つである。そして、科学である以上、一つ一つの教義についても科学的な実証をなさなければならないのはいうまでもなく、それが今回の〝解脱〟を実証するアンダーグラウンド・サマディの意味合いでもある。

宗教ブームといわれる昨今、実に様々な宗教団体が登場し、それぞれの教義にのっとり活動が行なわれている。しかし、そのほとんどはいわゆる思い込み宗教の枠を脱することができず、「信ずる者は救われる」という思い込みの体験しか与えられずに、〝宗教＝まやかし〟のイメージを大衆に与えているのが実情だろう。

ただ、ここで考えていただきたいのは、思い込み宗教が与えるこうしたイメージはむしろ〝信仰〟というものの弊害部分で、正確な史実を見ても明らかなように、本来、宗教は極めて実証的なものなのである。サキャ神賢(釈迦牟尼)の原始仏教、そして偉大な成就者たちによって伝えられた原始ヨーガの教えしかり、信仰の背景には思い込みからくる〝狂信〟ではなく、必ず証明が存在していた。

例えば、消費の世界において大量消費の時代から多様化といわれる今の時代への転換を招いたのは、経験の集積によりプロ化された消費者の志向の変化である。ブームを越えて大衆が本物を求める来るべき時代、皆さんが本物の宗教を選択される上で、本書がその一助となれば幸いである。

AUM Editorial Staff



この本をお読みになって、どのような感想をお持ちになりましたか。
あなたのご意見をぜひ下記の宛先までお送りください。

〒154　東京都世田谷区世田谷2−8−17
オウム出版『ザ・サマディPART II』読書係

◆各支部のご案内◆
富士山総本部　0544(54)1267
〒418-01　静岡県富士宮市人穴381-1
東京本部　03(3327)8565
〒156　東京都世田谷区赤堤2-42-5 杉田村松ビル1F
新東京本部（杉並道場）03(3396)9393
〒167　東京都杉並区下井草4-4-4　井口ビル2F
大阪支部　06(397)1022
〒532　大阪府大阪市淀川区西宮原1-8-14 八光ビル2F
福岡支部　092(474)2877
〒812　福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15 第一渡部ビル6F
名古屋支部　052(252)0709
〒460　愛知県名古屋市中区栄5-8-14 万国ビル3F
札幌支部　011(241)4938
〒060　北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1 チサンホテル本館2F
京都支部　075(371)3759
〒600　京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384 松本ビル2F
仙台支部　022(268)3904
〒982　宮城県仙台市若林区河原町1-4-20 十全会ビル2F
金沢支部　0762(51)8457
〒920　石川県金沢市京町25-20 ソフトオフィスビル2+4 2F
高知支部　0888(84)8286
〒780　高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F
広島支部　082(264)6250
〒732　広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F
横浜支部　045(243)8079
〒231　神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2 コスモ伊勢崎長者町ビル204
和歌山支部　0734(24)2859
〒640　和歌山県和歌山市駿河町42 和歌山酒販会館2F
水戸支部　0292(26)8044
〒310　茨城県水戸市中央2-2-1 HDビル6F
船橋支部　0474(66)4965
〒274　千葉県船橋市新高根6-26-18
埼玉出張所　0485(74)6205
〒366　埼玉県深谷市萱場441-8
渋谷出張所　03 (3476) 5065
〒150　東京都渋谷区道玄坂1-15-3　プリメーラ道玄坂317号
〈海外支部〉
ニューヨーク支部　212(421)3687
8 East 48th St. #2E (2nd Floor), New York, N.Y. 10017 U.S.A.
ボン支部　(0228)616647
Auf dem Hugel 48, Endenich, 5300 Bonn 1,　S.R.Germany

新しい“あなた”との出会い

古くから伝わる仏典やヨーガ教典によりますと、
聖者と呼ばれる人々は、この世のすべてを知り尽くし、
心は常に安定し、望めばかなわぬことがないという、
いわゆる“神”のような存在であったといいます。
しかし、彼らとて最初からスーパーマンであったわけではありません。
「長く厳しい修行の後、これらの力を得た……」
と教典は語っています。
わたしたちは、いまだ磨かれていない
ダイヤモンドの原石にたとえることができます。
この原石は、一見汚れていて光沢もないが、
洗い、削り、丹念に磨き上げることによって、
光り輝くダイヤモンドにすることができるのです。
この、洗い、削り、丹念に磨き上げる作業、
これが修行なのです。
すべてを知り尽くした最終解脱者、麻原彰晃尊師が、
数多くの技法の中から、忙しい現代人に最も適した修行法を厳選し、
内に秘められた素晴らしい力を
早く、しかも確実・安全に引き出してくださる。
それがオウム真理教です。

あなたにも必ず訪れる素晴らしい瞑想体験

黄金色の光の世界で

クッジュ・タラー（三十七歳・フィットネス・インストラクター）

1991年の1月に参加した集中修行での体験です。わたしの意識は黄金色の光の世界へと飛んでいきました。

ちょうど麻原尊師がエンパワーメント（エネルギー移入）してくださったときだと思いますが、おなかのマニプーラ・チァクラが熱くなって、すごい勢いでエネルギーが上がり、「あっ、抜ける」と思った次の瞬間、案の定、わたしの意識は別の世界に存在していたのでした。正確にいうなら、瞑想している意識と別世界の意識が同時に存在していたといっていいと思います。

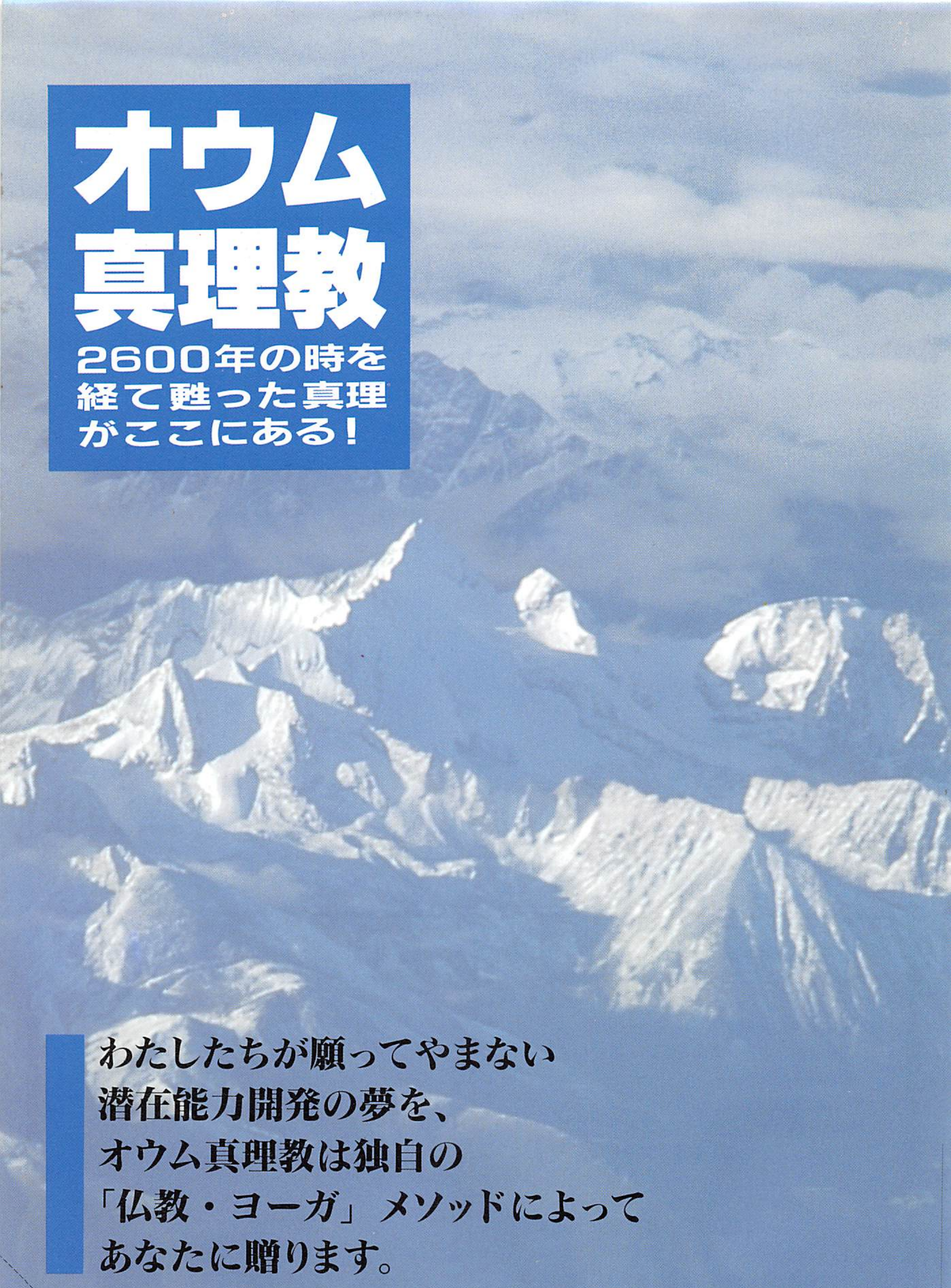
そこは黄金色の光の世界でした。街のようなものもあるのですが、木も家もビルもすべて光でできた、というよりは光の集合体のようなもので、反対側が透けて見えました。木や家といっても、形状もそんなにはっきりしていません。ただ、テロップではありませんが、見れば認識できるという具合でした。

この世界の“魂”もやはり光からできていて、それが光でできた街の中を行ったり来たりしています。その中の一つがわたしで、球体の光だったわたしは、ふにゃふにゃと形を変えながら飛んでいました。

大変不思議な世界ですが、このときの心の状態はゆったりしていて、広大な、安らいだ気持ちに満ちあふれていました。楽しい、悲しいといった感情は一切ありません。心の波のない状態で、それが広がっているという感じでした。

（1990年1月ラージャ・ヨーガを在家で成就）





ザ・サマディ
PARTII
資料請求券

●資料請求について

資料請求券を添付したハガキ、または電話にて最寄りの本・支部(71ページ参照)までご連絡いただければ、入信案内等詳しい資料をお送りいたします。

笑顔の明日を予感させるライフクリエートマガジン

月刊『えんじょい・はぴねす』

Enjoy Happiness



楽しいはずの人生なのに、
空しさを感じるのはなぜ？
生活だけでなく、
〝心〟も豊かになりたいから……
すべての苦しみと悲しみに
別れを告げたいから……

だから今日から
〝えんじょい・はぴねす〟

── 主な内容 ──

◇Voice of Buddha
最終解脱者が贈る幸福メッセージ
「光を超えて──えんじょい・はぴねす」
麻原彰晃尊師

◇Special Lecture
精神世界ファン必読の特別講義！
「宗教は一つの道」麻原彰晃尊師

◇JĀTAKA Stories
「仏陀釈迦牟尼からの贈り物
── 釈迦牟尼の輪廻転生に見る真実」

◇Love and Truth
一息つきたいあなたを優しく包む真理エッセイ

◇あなたもわたしも創造主
飛行船、ロボット、ホバークラフト……、つくる喜びを忘れた我々に科学者気分を味わせてくれる誌上製作コーナー

◇真理を科学する
◇ワンポイント・ヨーガ
◇健康を食べよう！
◇エンジョイ・ヘルス
◇ズーム・アップ・オウム真理教
◇大宇宙占星学
◇イングリッシュ・イン・ダルマ
◇パソコンでおしゃべり
◇真理と愛のハーモニー

「宗教には興味があるけど、
でも信徒になるのはちょっと……」
そんなあなたに贈る最高のプレゼント！

『えんじょい・はぴねす』を定期購読していただきますと、様々な特典が受けられる〝EH会員〟になることができます。ＥＨ会員は信徒ではありませんが、自由にオウムのイベントに参加できる権利を持っています。気軽な気持ちでオウムをのぞいてみませんか？

―― 苦悩を超えて ――
えんじょい・はぴねす



EH会員7大特典

1. オウム真理教主催のイベント、
説法会等へ自由に参加できます。
2. 国内および海外の本支部道場をいつでも利用できます。
3. 幸福情報を満載したＥＨ会員手帳をもれなく
プレゼントいたします。
4. 成就者との対面および電話による 悩み相談が受けられます。
5. 各種イニシエーションを受ける資格が得られます。
6. 聴くだけで心が癒えるアストラル音楽テープなど、
オウム真理教の販売物を信徒同様の安価で購入できます
7. 日本シャンバラ化計画基金（永代帰依祈願を除く）への
参加資格が与えられます。

〝えんじょい・はぴねすの会〟会員（ＥＨ会員）になるには？
※入会金は一切無料。月刊『えんじょい・はぴねす』の定期購読を申し込むと、料金の払い込みが確認された時点でＥＨ会員となります。なお、定期購読の申し込みは6ヵ月単位で郵送料込み6000円ですのでご注意ください。

※詳しくはお近くのオウム真理教の本・支部道場までお問い合わせください
（71ページ参照）。

ムMOOKシリーズ

それでもキミはまだ疑うのか？

28人の決定的瞬間が証明する現代の神秘！

麻原彰晃の「ズバリ！浮揚」

SUPERNATURAL POWER

監修 麻原彰晃　オールカラーA4変形判 128ページ

定価1200円（本体1165円）

絶賛発売中！



人の魂に宿る不思議な力
我々はそれを
超越神力
と呼んでいる

PART 1
【天耳通・他心通】



神々の声、遠くの声を聞く「天耳通」、相手の心を知る「他心通」を特集した待望のシリーズ第一弾！

麻原彰晃著
B6判 定価980円

PART 2
【前生を知れ！ 死生智の秘密】



修行によって魂が本来持っている"不思議な力"が発現したとき、人は瞑想等によって自らの前生を思い出し、輪廻転生の仕組みを悟る。

麻原彰晃著
B6判 定価980円

PART 3
【完全なる絶対なる神の叡智、漏尽通】



だれにも著わせなかった最後の超越神力"漏尽通"を取り上げた話題の書。人の魂に宿る不思議な力、超越神力のすべてが今明らかになる。

麻原彰晃著
B6判 定価550円

シリーズ

●全国の有名書店にてお求めください。弊社に直接お申し込みの場合は下記まで。

オウム出版
本　社　〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17
TEL 03(3439)6043 振替 東京2-109325
営業部　〒168 東京都杉並区宮前3-8-11
TEL 03(5370)1598



ザ・サマディ PART II
実録：アンダーグラウンド・サマディ 1991

定価700円(本体680円)
1992年1月19日　初版発行

●編　集　オウム出版広報編集部
●発行人　松本知子　石井久子
●発行所　株式会社 オウム
〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17
電話03(3439)6043
振替　東京2-109325

ISBN4-900497-75-4 C0014 P700E



DOCUMENTARY
UNDERGROUND
SAMADHI
1991

ISBN4-900497-75-4 C0014 P700E 定価700円(本体680円)